

## ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（2）レフカンディ

高橋裕子

### はじめに

ここ半世紀においてギリシアの初期鉄器時代像は劇的に変化したが、恐らくそれに最も大きな影響を与えたと思われる遺跡が、エウボイア島のレフカンディである。

レフカンディは我が国においても概説書の類などではしばしば紹介されよく知られる存在ではあるが、トゥンバから発見されたヘロオン（英雄廟）ばかりが注目され、遺跡全体の資料掌握や具体像の解明を目指した業績が存在しない。かかる現状に鑑みて、本稿においては当該期を代表するレフカンディという遺跡に焦点をあて、資料や関連研究

を紹介することにより、この集落の実態を多少なりとも具体的に把握するよう努めていきたい。

ただしレフカンディに関しては、調査が開始されてから半世紀が経過した現在においても、未だ詳細が公表されていない資料が数多く存在する。たとえば報告書の第二卷（*Lefkandi II*）はトゥンバのヘロオンに関するものであるが、一九九三年に出版されたその第二部で第三部が予告されているにも関わらず未だ世に出されてはいない<sup>1</sup>。また報告書第三卷（*Lefkandi III*）はトゥンバの初期鉄器時代の墓域を扱っているが、一九九六年に図版のみが出版されたあと長らく本文が未刊行のままである。おそらく遠からず

出版されると思われるが、本稿執筆時点においては確認されえない。<sup>2)</sup>

また二一世紀に入ってからからの調査に関しては、概報や調査関係者の論文などからその成果の断片をうかがい知るのみである。

したがって現時点において本稿を執筆することが適切であるのか否か躊躇を感じざるを得ないが、それでも、これまでに発表された資料および研究の概要をまとめておくことは、今後のために全く意味がないことではないであろう。

以下、第1章においては調査史、第2章で遺跡の概要を、その後時期ごとに遺構や遺物を紹介していきたい。

## 第1章 調査史

レフカンディはギリシア本土を対岸に臨むエウボイア島中部西岸の遺跡であり、より具体的にはレラントス平野のほぼ中央の沿岸部に存在する。良港を備えており、南エウボイア湾を下ってエーゲ海へと出るのに恵まれた地の利を有する(図1)。

平野周辺に目を向けるならば北西にはカルキス、西にはエレクトリアと二つの有力集落が控えており、レフカンディは両者にはさまれるように位置している。ただしカルキス

とエレクトリアがその後ポリスを形成し後の時代の文献にも言及があるのとは対照的に、レフカンディに関しては文字史料が存在せず、古代の名称も不明である。<sup>3)</sup>

前古典期以降ポリスが形成されなかったという事実は、現代の研究にとっては幸運なことでもあった。初期鉄器時代の遺跡の中にはその場所が後代においてポリスの中核地点として発展したために、既に古代の間に大規模な破壊を被った例が数多く存在する。その点レフカンディは、前八世紀末に主要な役割を終えたあととは古代において活発な人的活動が展開されなかったため、遺構や遺物が極めて良好な状態で埋蔵されていた。

このレフカンディが最初に注目を集めるようになったのは、一九六〇年代のことである。のちに発掘を手がけることになるM・ポツパムやL・H・サケットを含む研究チームがエウボイア島を踏査した際にレフカンディが目にとまり、調査されることになった。<sup>4)</sup>一九六四〜一九六六年にかけてクセロポリスで最初の発掘が行われたが、既にこの時点でレフカンディの重要性を示す数々の遺物が出土した。さらに現代のレフカンディの市街地一帯で幾つもの墓域が調査されたり、また一九八〇年代にはトゥンバのヘロン(英雄廟)から時代像を覆すような衝撃的な資料(後述)が出土したりしたため、一躍初期鉄器時代を代表する

遺跡と目されるようになった。また一般向けの業績が出されたり、概説書で大きく取り上げられたりしたことにより、この時代の専門家のみならず、広く世間に知られる存在となった。<sup>⑤</sup>

しばらく大規模な調査は中断されていたが二〇〇三年からオックスフォード大学のI・レモスを中心とする新たなプロジェクトが組織され、クセロポリスの発掘などが行われた。二一世紀にふさわしく学際的な体制がしかれ、土器の科学的成分分析や植物考古学 (archaeobotany) の調査などもその一環に組み込まれている。

一九六〇年代以来のレフカンデイの調査が当該期の研究にもたらした成果は多岐にわたるが、ここではエウボイアにおける土器編年の確立に多大な貢献を果たしたことを強調しておきたい。最初の発掘当時はこの一帯の編年が現在のように確立しておらず、また発掘している当の研究者も十分な知識を有していなかったことから調査には困難を極めた。<sup>⑥</sup> エウボイアでは原幾何学文様期の特徴が長期に渡って維持され、アッテイカのように次々と変化が見られるわけではないことが、その困難を助長したことは想像に難くない (図2)。クセロポリスから発掘された層位的な資料や、編年が詳細に確立されているアッテイカからの搬入土器を手がかりに、徐々に研究が進展し、その結果エウ

ボイア独自の編年の枠組みが詳細に形づくられ、さらにはエウボイアの土器が出土する他地域の研究の進展にも大きく貢献することへとつながった。

## 第2章 遺跡の概要

今まで発掘されてきたレフカンデイという遺跡の調査区域は、大きく二つに分けることができる。クセロポリスと現代のレフカンデイの市街地周辺である。この順番にその概要を見ておこう (図3)。

現代のレフカンデイの街から見て東方に位置するクセロポリスは、この遺跡が発掘対象とされるきっかけとなった海沿いの集落址である。ほぼ東西方向に五〇〇メートル、南北方向に一二〇メートルほどの細長い平坦な台地から、長期にわたる居住の痕跡が発見された。「テル」という言葉が使用されることもあるが、<sup>⑦</sup>しかし人的活動の痕跡が累積することにより造成された西アジアのテルとは異なり、クセロポリスは海に張り出した丘陵状の台地に営まれた集落のあとである。<sup>⑧</sup>

一九六〇年代に発掘されたのはごく一部分であり、中央よりやや東よりに主要な調査区が設けられたほか、丘陵各地で試掘が行われた。発掘範囲が限られていたわりにはそ

の成果は目覚ましく、青銅器時代から初期鉄器時代にかけての遺構が層的に確認された。最もさかのぼるところでは初期青銅器時代の層が発見されており、その上に中期青銅器時代のそれが堆積している<sup>①</sup>。

続く後期青銅器時代の資料も出土しているが、現在のデータでは、ミケーネ時代の盛期である後期青銅器時代ⅢB期の資料は、その崩壊後のⅢC期の資料に比べると必ずしも多くはない。その理由の一つに、たとえば主要調査区で見られたように、ⅢC期の建物がⅢB期の層を一部掘り込んで建造されていることがあげられる<sup>②</sup>。ただし今後さらなるⅢB期の遺構が発見される可能性があり、現段階では断定的な結論を出すことは控える方が賢明であろう<sup>③</sup>。

ところで、青銅器時代におけるこの集落の具体像を考える上で、重要な資料が台地の北西端に設けられた試掘調査区C (Trial C) から出土している。それは、台地縁辺部の地形に沿って築かれていたと思われる城壁である。中期青銅器時代の終わりからミケーネ時代にかけての土器片とともに、城壁の一部と思われる遺構が検出された。それらの時期においてクセロポリスの集落は、おそらく防御のために、城壁で囲まれていたことが明らかとなった。この事実はこの集落の社会を検討する上で重要な要素となっている<sup>④</sup>。

さらに、しばしば「集落址」や「居住域」と描写されるクセロポリスではあるが、埋葬施設が設けられた時期もあつたことは付け加えておくべきであろう。台地の北東側縁辺でギリシアの考古局による緊急発掘が行われ、中期青銅器時代の墓が発見された。初期鉄器時代の墓域はクセロポリスではなく現代のレフカンディの市街地周辺に設けられているため、この中期青銅器時代の墓の存在は居住域と墓域との位置関係やレフカンディという遺跡の遺構分布や土地利用を通時的に考える上で、見逃してはならない資料である<sup>⑤</sup>。

一方で、現代のレフカンディの街の周辺域には、複数の調査区が点在している(図3)。中でもとりわけ有名なものが初期鉄器時代のヘロオン(英雄廟)という建物が発掘されたトウンバである。そのほかにも、スクブリスやパリ・ペリヴォリアなどの調査区があり、主に初期鉄器時代の墓が発見されている。

これらの墓域とクセロポリスとの関係であるが、報告書第一巻(Lefkandi I)には現代のレフカンディ一帯の墓域がクセロポリスの集落に属するか否かは不明であるという記述がある。その理由は、墓域からは初期鉄器時代初期(Ⅱミケーネ期や初期原幾何学文様期)の資料も出土しているが、クセロポリスではその時期に人々が居住していた痕跡

が当時は確認されていなかったことにある。しかし、後述するように、二〇〇三年以降の調査でクセロポリスから初期鉄器時代でも初期の資料が出土したため、この問題は解消された。

ただし二〇〇三年以前においても両者は同じ集落に属するという見解が広く浸透しており、管見の限りそれに異を唱える業績は存在しない。居住域であるクセロポリスと埋葬施設が主である西側の調査区は五〇〇〜六〇〇メートルほど離れた距離にあるが、それは機能分化による土地利用の展開と解釈できよう。また両者に挟まれた場所ですぐれ何らかの遺構が見つかることも否定できず、必ずしも二つの区域に分かれていたわけではない可能性も考慮される。実際にクセロポリスの北西方向に設けられた調査区SLからは居住の痕跡を示唆する資料が発見されている。クセロポリスおよびトゥンバをはじめとする西側の調査区すべてがレフカンデイという遺跡を構成しており、少なくとも本稿の対象である初期鉄器時代に関して言えば、一つの集落として見なすことに不都合な点は存在しない<sup>15)</sup>。

以下、この遺跡の資料を時期ごとに紹介していく。まず次項においては、青銅器時代最終末期である後期青銅器時代ⅢC期に焦点を当てることとしよう。

### 第3章 青銅器時代終末期

初期鉄器時代以外に、レフカンデイは最初の発掘当初から大きな注目を集めた時期がもう一つある。それは後期青銅器時代ⅢC期、つまりⅢB期の末にミケーネ文化が崩壊したあとの青銅器時代終末期である。ただし、土器や埋葬に関する個別の業績が発表されることはあったが、成果の全容は長らく明らかではなく、二〇〇六年に当該期に焦点を当てた報告書 (*Lefkandi IV*) が刊行されたことによりその詳細がつまびらかになった。この *Lefkandi IV* の報告を中心に、二一世紀に入ってから発掘の予備報告などもまじえながら、後期青銅器時代ⅢC期の資料を簡潔に紹介していきたい。

#### (1) 遺構

後期青銅器時代ⅢB期までのミケーネ時代とそれ以後のⅢC期とは、クセロポリスにおける集落の様相は大きく変化している。ⅢC期の最大の特徴は、おそらくその居住が大規模なものであり、集落が拡大そして繁栄の兆候を示唆していることであろう。クセロポリスのⅢC期は大きく三つに区分されているが、時期ごとに一九六〇年代の発掘における主要調査区の成果を見ていこう (図3のクセロポ

リス(XEROPOLIS)の丘陵上の四角い部分が主要調査区<sup>(20)</sup>。

第一期(Phase 1)に関しては、三棟の建造物(「東の家」「西の家」「南の家」)が確認されたが、いずれもその一部しか発掘されていない。それでも多くの知見が得られており、おそらくそれらすべてが少なくとも二階建てであった可能性が推測されている。ということは、当時の人々が相応の建築技術を有していたことや、資源や労力の面においてそれを可能にするだけの余力を有していたこと、ある程度の人口をかかえていたことなどがうかがわれよう。

またこの第一期(Phase 1)は二つに細分化<sup>(21)</sup>されている。そのうちの最初の時期(Phase 1a)はミケーネ文化崩壊後の最初の建造物であるが、それらは先行するⅢB期の建物を掘りこんで造営されており、以前の建物を再利用しようとした傾向はうかがわれ<sup>(22)</sup>ない。土器に関して言えばⅢC期のそれはⅢB期から受け継いだ要素も存在したことが指摘されており、両者の関係は慎重に検討する必要があるが、少なくとも居住環境という点においてはⅢC期の人たちは全く新しいスタートを切ったと推察される。

第一期の建物が焼壊したあと、すぐに次の時期(Phase 2)の建造物が建設される。第一期と比べると部屋の区画などに規則性が高く特徴が変化しており、単に建て直したというよりも、新しく設計されたと思なされるで

あろう<sup>(23)</sup>。

そしてこの時期の大きな特徴として注目すべきは、床下に土葬墓が作られたことにある。床面を掘りこんで土壙墓が設けられるこの葬法は、既に第一期(Phase 1b)にも行われていたが、第二期に入ってから本格化する。遺骨に土器片などがかぶせられていることもあるが総じて副葬品は少なく、豪華な印象は受けない。また被葬者の年齢は幼児や子供のみならず、成人も含まれていた<sup>(24)</sup>。

建造物内部におけるかかる埋葬はギリシアの他遺跡からも報告があるが、一般に被葬者が幼児や小児であるのに対して、クセロポリスからは成人の遺骨も発見されている。幼児や小児が家屋の床下に埋葬される場合には、その理由として、幼い子供を失った親が日ごろ生活する場所に埋葬した、または成人する前であり、集落の正式な構成員となっていないなかったため、正規の墓域ではなくこのような場所に埋葬することが選択されたという解釈もなされようが、成人の場合には異なる見解が求められる。クセロポリスのこれらの資料は、古代ギリシアの埋葬習慣や死生観とかまびすしく議論されてきたテーマに一石を投じる事例であらう。

ちなみにレフカンディにおいては、初期鉄器時代の墓域が多数発見されているのとは対照的に、ⅢC期を含む後期

青銅器時代の主要墓域がどこにあったのかは未だに不明である。それが発見され、被葬者や副葬品の比較などが行われれば、建造物内部の埋葬に関してもより踏み込んだ検討が可能になるかもしれない。

クセロポリスの建造物に話を戻すと、第二期も二つの時期に区分されており (Phase 2a, 2b)、二b期の建物が終末を迎えたあと第三期へと移行していく。報告書第四巻 (Lefkandi IV) ではなぜ二b期の建物が使用されなくなったのかは不明と記されており、一方でI・レモスによれば炎を受けて破壊を被った痕跡があるという。そしてそのあとの第三期 (Phase 3) の建物が、クセロポリスにおいて青銅器時代を締めくくる居住の痕跡となる。どのような状況でそれが終焉を迎えたのかという点に関してはやはり不明な点が多いが、破壊されたというよりは、放棄されたという表現が適切のようである。

二〇〇三年以降のクセロポリスにおける調査ではさらに目覚ましい結果が得られている。メガロンと呼ばれている建物や城壁が発見され、ⅢC期の集落の繁栄ぶりがさらに強調されるようになった。依然として発掘された区域が全体のごく一部であることには変わりがないが、当該期の集落の実態がより具体的に明らかにされた。報告書の公刊が俟たれよう。

## (2) 遺物

ⅢC期の遺物に関して、まず土器、次にそれ以外の遺物について、主要なものを紹介したい。

ⅢC期の土器は、クセロポリスの最大の調査成果の一つである。多数の土器が層位的に発掘されたことから、ミケーネ土器研究の泰斗であるP・マウントジョイも記しているように、当該期の土器研究に目覚ましい貢献を果たした。とりわけ絵画様式 (pictorial pottery) と呼ばれる土器類の中には人口に膾炙した重要資料がある。その中の一点をここで紹介しておこう。特徴的な図柄が描かれたアラバストロンという器形の土器である (図4)。

アラバストロンは肩の部分に取っ手を持つ容器であり、胴部が丸いものもあるが、これはほぼ円柱形のように底部に対して胴部が垂直に接するタイプである (straight-sided alabastron)。高さは一八・三cm、直径は底部が一・六cm、口縁部が一・一cmであり、中型のサイズと言えるであろう。クセロポリス出土のⅢC期の土器の中でこの土器が最も有名なものの一つに数えられる最大の理由は、図柄がユニークなことにある。こげ茶味がかった黒地の上に白色で模様や図が描かれているが、とりわけ胴部には想像上の生き物や動物が生き生きと表現されている。主要な図像が二組あり、そのうちの一つは二匹のグリフィンが巢にいる子

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡(2) レフカンディ(高橋)

供に餌を与えている場面、もう一組は後ろを振り返っている大きな角を持つ鹿と羽を持つスフィンクスである。このうちグリフィンの図柄が報告書第四卷(Lefkandi IV)のカヴァーに採用されていることから明らかなように、当該期のレフカンディを代表する資料である。

この土器をはじめクセロポリスから出土した絵画様式の土器の図像に関しては、さまざまな解釈や分析が行われている。先行するミケーネ時代や東方地域との関係、図像表現に見られる精神性、製作技術などが、代表的なところであろう。また絵画様式のみならず他のタイプのものも含めて、土器研究がⅢC期におけるレフカンディ像の復元に果たす役割は極めて大きい。近年とみに注目されている東ロクリスのミトウルウなどとの比較研究が進展すれば、周辺地域全体でのレフカンディの特徴や集落同士の関係性などもより詳細に明らかにされていくであろう。

次に土器以外の遺物についてである。クセロポリスのⅢC期の層からは、石器や骨製品など当時の生活実態を説明するに有益な遺物のみならず、他地域からの搬入品も出土しており、ミケーネ文化崩壊後のこの時期においてもレフカンディの集落が孤立した状態で営まれていたわけではないことが見て取れる。たとえばその一例として黒曜石があり、産地として著名なエーゲ海のメロス島のものではない

かと指摘されている<sup>35</sup>。一方でより広い地域を視野に入れる必要がある遺物もあり、ラピスラズリのスカラベや象牙製品(Ivory button)<sup>37</sup>の場合には、搬入の経路や時期、どこで加工されたかなどが問題となろう。またキプロスとの関連が示唆される鉄製のナイフは、鉄器時代への移行という観点からも重要である<sup>38</sup>。

さらに見逃してはならないことが、青銅製品を製作していたことを裏付ける資料が出土していることである。金属製品の鑄型、土製のるつぼの破片、スラグなど、クセロポリスではⅢC期に青銅製品が製作されていたことを示唆する遺物が発見されている。青銅製品の製作は、のちの初期鉄器時代におけるレフカンディの繁栄を導いた大きな要因と推測されており、ⅢC期のそれとの関連が問題とされよう。

### (3) 繁栄の要因

このように重要資料が出土していることから、なぜミケーネ文化が崩壊したあとにこの集落は繁栄の兆候を示しているのかという点が議論されてきた。それに関する重要な指摘としては、ミケーネ時代にこの一帯に大きな影響力を有していたポイオティアのテーベとの関係があげられている。

テーベはポイオタイアのみならずギリシア世界全体を視野に入れても、ミケーネ時代の大集落であったことが確認されている。遺跡の上に現代の街が広がっているため小規模な緊急発掘が多く内容を把握することが困難ではあるが、後期青銅器時代においてテーベはギリシアでも有数の、そしておそらく、ミケーネ文化の中心地であるアルゴリスを含むペロポネソス半島を除外すれば、筆頭にも数えられる大勢力を誇っていた可能性が高い。<sup>④⑤</sup>

それは線文字B文書の出土からも認められるところであり、その中にはエウポイアの地名が記されているものがある。<sup>④⑤</sup>ということは、ミケーネ時代にはテーベとエウポイアの間には、おそらく何らかの強い結びつきがあったと推察されよう。それがテーベによる支配と表現されるようなものであったか否かは不明であるが、少なくともエウポイアがテーベの影響下にあったことは否定できない。

レフカンディの古代の名称は不明であり、テーベの線文字B文書はこの集落に関する直接的な史料ではない。しかしそれでも、当然ではあるが、テーベとエウポイアとの関係はレフカンディを考える上で大きな意味を持つ。ミケーネ文化崩壊に際してテーベも被害を受けるが、そのあとのⅢC期にクセロポリスが繁栄を謳歌したという事実はおそらく単なる偶然ではない。テーベを中心とした周辺地域全

体の枠組みがその勢力減退に伴って瓦解していく中で、レフカンディを取り巻く環境が大きく変化したと推察されよう。<sup>④⑤</sup>

さらに筆者が注目していることの一つに、クセロポリスの資料によれば、後期青銅器時代ⅢC期の中に初期鉄器時代の繁栄へとつながる動きが既に開始されていたという指摘がある。これは二〇〇三年以降の調査成果に関する発表の中でI・レモスが述べていることであるが、クセロポリスにおいてはⅢC期の初期(レフカンディの第一期)の終わりに転換期があり、ミケーネ時代の過去から決別して新しい社会を築いていくような変化が見受けられるという。<sup>④⑤</sup>

先に記したように、一九六〇年代の調査成果から、クセロポリスの第一期の建造物は既にミケーネ時代のそれを継承することなく、新たなスタートを切っていたことが見て取れる。レモスが指摘するように、さらに第一期の終わりに一つの画期が観察されると、レフカンディの人たちは、ⅢC期の中に立ち止まることなくさらに社会を変化させ、発展させたということである。それが初期鉄器時代の繁栄をもたらすことへとつながったという意見は、筆者がアルゴリスの諸遺跡を検討した際に抱いた印象と一致する。

アルゴリスにおいてはミケーネ時代における最大勢力で

あるミケーネが初期鉄器時代には弱小集落へと転落する一方、ミケーネに次ぐ大集落であったティリンスは初期鉄器時代にも相当程度の繁栄を享受した。そして筆者は、このような相違をもたらした一因として、ミケーネ文化崩壊直後のⅢC期の集落のあり方があげられるのではないかと考えている。ミケーネ時代に既に居住されていた集落の場合には、直後のⅢC期、すなわちかつての政治や行政のシステムが機能しなくなつたすぐあとの時期に、人々を統率して新しい社会を築いていくような有力者が存在し、集落の立て直しをはかることができたか否かが、のちの初期鉄器時代の明暗を分けることに影響を与えたのではないかと。そのような仮説が、レフカンディの資料からはどのように検証されるのか、今後とも注意を払っていききたい。<sup>④⑤</sup>

#### 第4章 亜ミケーネ期

青銅器時代を締めくくる後期青銅器時代ⅢC期のあと、エウボイアにおいてもアツティカ同様に、鉄器時代への移行期とも言える亜ミケーネ期という編年区分が設定されている。

一九六〇年代のクセロポリスにおける発掘では亜ミケーネ期の資料は出土しなかった。ただしスクブリスからは亜

ミケーネ期の墓が出土していたため、集落全体としては青銅器時代終末期から鉄器時代へと、おそらく細々と、何らかの人的活動は途切れることなく営まれていたと推察されていた。そして亜ミケーネ期の人々は、後期青銅器時代の居住者の末裔なのか、それとも新しく別の場所からやってきた人々であるのか、という点も問題となっていた。<sup>⑥</sup>

ところが二一世紀に入ってからクセロポリスの発掘調査では、早くも初年度(二〇〇三年)に亜ミケーネ期から原幾何学文様期にかけての建造物や遺物が出土し、従来の見解は大幅な修正が迫られることとなった。<sup>⑦</sup>現時点ではまだ十分な資料は公けになってはいないが、青銅器時代から鉄器時代への移行期においてクセロポリスが継続して居住されていたことは明らかである。<sup>⑧</sup>

最後に、絶対年代に関する研究に付言しておきたい。ギリシアにおける青銅器時代終末期から初期鉄器時代にかけての絶対年代に関しては、決定的な手がかりがない。かかる状況の中で、レフカンディの遺物を含む資料に対して放射性炭素年代測定法による分析が行われた意義は大きい。それによると、亜ミケーネ期から原幾何学文様期への移行期は、前一一世紀後半であるという。綿密な調査により豊富な資料が発掘されているレフカンディの遺物に対して理化学的な研究が行われることは学界全体が切望していると

ころであり、このような研究が加速されることを祈りたい。<sup>50)</sup>

## 第5章 初期鉄器時代 ①概要

亜ミケーネ期のあとの原幾何学文様期以降、レフカンディは他を圧倒するような繁栄期を迎える。本章においては初期鉄器時代の集落の概要を、そして次章においては当該期における他地域との関係を示す遺物に焦点を当ててととする。

以下、クセロポリス、トゥンバのヘロオン（英雄廟）、そして墓域の順に見ていきたい。

### (1) クセロポリス

レフカンディの集落で人々の日常生活において中核的存在であったと推察されるクセロポリスからは、層位的な調査成果から、初期鉄器時代の様々な生活および活動の痕跡が確認されている。

一九六〇年代の発掘の主要調査区（図3、クセロポリス（XEROPOLIS）の丘陵上の四角い部分）から出土した遺構でまず言及すべきは、楕円形または馬蹄形の建造物である（図5、AとBの壁で囲まれた建物）。幅は五メートル

ルほどであり、鉄製のナイフや砥石、粗製土器など日常生活用品が出土した。おそらく居住用の家屋であろうと報告されており、建物内部の随所に火を受けた痕跡が残されている。後期幾何学文様期に焼壊したという。<sup>51)</sup>

この建造物の東側からは、おそらくそれと同時代と推測される三つの円形遺構が発見された（図5、E、F、G）。いずれも類似の形状をしており、円形状に石が敷き詰められている中に、二本の溝が平行に走っており、穀物倉の可能性が指摘されている。さらにもう一つの円形の遺構が発見されているが（図5、H）、これは先の三遺構（E、F、G）とは異なり、円形を呈する壁で囲まれているだけで、内部に石が敷き詰められているわけではない。報告書では、動物を入れておくための囲いではないかという可能性が示唆されている。<sup>52)</sup>

「居住用の家屋」「穀物倉」「動物用の囲い」という解釈はいずれも仮説ではあるが、日常生活を復元することが難しいこの時代にとって括目にあたいする資料である。

またさらなる重要資料として、調査区東側のピット1（図5、左端の「1」という番号が記されている遺構）から、青銅製品が製作されていたことを明示する遺物が出土した。ピット1は層位的に当該調査区の初期鉄器時代の遺構の中では最も早い時期に属するものであることが確認され

ており、後期原幾何学文様期の土器が出土している。それをもとに青銅製品製作関連の資料も前九〇〇年ごろのものと報告されている。そしてその中で最も著名なものは、土製の鑄型の断片であろう(図6)。直線や渦巻文様が施されており、三脚の鼎(tripod)の脚の部分である可能性が示唆されている。

さらに、主要調査区から南東方向に数十メートルほど離れた場所に設けられた試掘区(Trial) Wからも、青銅のスラグ(slag)などが発掘されている。残念ながら年代は不明であるが、おそらく青銅製品の製作関連資料と見なして差しつかえないであろう。

したがってクセロポリスでは、少なくともある一定の時期においては、青銅製品が製作されていたことは明らかである。周知のようにエウボイア湾周辺のこの一帯は青銅製品の生産で著名な地域であるが、それがこの集落の繁栄の源泉であったことは想像に難くない。

また先に記したように、クセロポリスからは後期青銅器時代ⅢC期に関しても同種の資料が出土している。ⅢC期(もしくはそれ以前)からの技術が初期鉄器時代の人々に伝えられた可能性は十分に考えられる。第3章の終わりに言及したとおり、筆者はⅢC期の社会のあり方が初期鉄器時代の繁栄または衰退に大きな関わりがあると考えている

が、青銅製品の生産というような技術的側面からもそれが検討されよう。

二〇〇三年以降の調査でも大きな成果が得られているが、それについてはいずれ別稿にて紹介したい。

## (2) ヘロオン

トゥンバのヘロオン(英雄廟)は、初期鉄器時代に関するギリシア全域の資料の中でも最も有名な遺構と言っても過言ではない。前一〇世紀という初期鉄器時代でも前半期にこのような建造物が存在したという事実は、時代像を一変させるほどの衝撃をもたらした。

ヘロオンは見晴らしのいい丘の頂上に建造されており、明らかに特別な立地が選択されている。一九八〇年二月から試掘が開始されたが、その終了後の同年夏には土地の所有者が不法にブルドーザーで破壊する事件が発生した。それにより遺構の一部は決定的な損傷を被ったが、それでも一九八一〜一九八三年にかけての本格的な発掘でほぼその全容は明らかにされ、大きな成果がもたらされた。

ヘロオン(英雄廟)という名称は、おそらく比較的早い時期に、調査者により名付けられたものである。当時の人々がどのようにこの建物を呼んでいたのかは不明であり、またその機能や用途が実際に英雄廟としてのそれであったか

否かも明らかではない。

ヘロオンは長さ五〇メートル前後、幅一三・八〇メートル前後の細長のびた馬蹄形（ヘアピン型）の建造物であり、東側に入口が存在した。建物の内と外の双方に一連の柱穴があり、おそらく屋根は植物で葺かれていたと推測されている（図7）。幾つかの部屋に分かれているが、そのうち中央の部屋から驚くべき資料が出土した。

中央の部屋はこの建物で最も広く、大きさは東西方向に二メートル、南北方向に九メートルある（図8参照）。そのやや東より二つの大きな堅穴が設けられており、そのうち北側のものからは四頭の馬が発見され、南側には二人の人物が埋葬されていた。埋葬人骨のうち一つは火葬（埋葬1）、もう一方は土葬（埋葬2）である（図9）。

火葬人骨（埋葬1）は青銅製のアンフォラに安置されており、それが青銅製の鉢（ボール）で封じられていた。周辺に剣ややり先などの武器が埋納されていたことから、被葬者は男性と判断されており、戦士と記されることが多い。年齢は三〇〜四五歳と推定されている。

骨壺として使用されていた青銅製のアンフォラは、高さが七・一cm、胴部の最大径が五・九cmもある大型のものである。口唇部のへりや取っ手には精緻な装飾が施されており、弓矢を持った人間やライオン、牡牛が描写されている。報告

書（*Lejkandi II.2*）でこのアンフォラに関する章を担当

したH・W・カトリングは、文様の分析などからこれは後期青銅器時代の終わりごろにキプロスで製作されたものと結論し、埋葬が行われた年代とはおそらく一〇〇年前後の開きがある、したがって骨壺として使用された時点において既に骨董的価値を有するものであったと見なしている。いつごろレフカンディの集落にもたらされたものなのかという問題も含めて、ギリシアとキプロスおよび東地中海方面との関係を探る上で、重要な資料である。

もう一方の土葬の人骨（埋葬2）は、火葬人骨（埋葬1）のすぐ北側から、頭蓋骨を西に置いた仰臥伸展葬の状態で発見された。歯の状態から判断して年齢は二五〜三〇歳前後、またネックレスや指輪などの装身具を身につけていたことからおそらく女性であろうと推察されている。胸部には左右それぞれに金製の円盤状装飾品が、その間には三日月状の金製品が置かれていた。頭部周辺からは象牙の柄頭を有する鉄製ナイフが出土している。

この女性の装飾品の中でもとりわけ注目されるもの一つに、おそらく近東製と思われるネックレスがある。中央に円形の金製ペンダントがあり、その左右に配されているビーズは金製やファイアンス製という豪華な製品である。このネックレスが注目される理由は、単に近東からの搬入

品であるというのみならず、その年代がこの女性の埋葬から六〇〇年以上もさかのぼる前一七〇〇〜一六〇〇年ごろのものとして推定されることにある。この女性が生きた時代にレフカンディにもたらされたものか、それともはるか昔に運ばれてきたものを受け継いだのかという問題に関しては、確たることは不明である<sup>⑧</sup>。

ただし、この埋葬が行われたところにもたらされたと考ええるよりは、長く継承されてきたものと見なす方が妥当ではないか。というのも、この被葬者の別の副葬品であるフアイアンス製のビーズ二個がミケーネ時代のものであり、やはり埋葬が行われた時点から少なくとも二五〇年はさかのぼる品であったのではないかと<sup>⑨</sup>いう指摘があるからである<sup>⑩</sup>。上記のキプロス製の骨壺も含めて、製作された年代も生産地も異なる長い年月を経た威信財が複数出土しているとなると、おそらくこのヘロオンに埋葬された被葬者二名は先祖伝来の財産を継承するような立場にあったということであろう。そしてそのような価値を有する財産が埋葬または副葬のために使用されているということが、このヘロオンの資料の大きな特徴の一つである。

いずれにせよ、このような遺物は埋葬されていた両者双方が高い身分にあり、集落の中で富裕層および有力者としての地位や立場を有していたことを物語っている。それに

より両者の関係に関しては、土葬の女性は火葬された男性の配偶者であろうと一般に見なされている。これら二つの埋葬が同時に行われたのか否かに関しては確実に判断しうるデータは存在しないが<sup>⑪</sup>、もしも同時に行われた場合には女性の殉死の可能性が、さらには遺骸のすぐそばで発見されたナイフによりその命を奪われた可能性が指摘されている<sup>⑫</sup>。

またこの二人の墓壇の南側からは、大型の土器が発見された(図10)。取っ手が付いた容器(クラテール)であるが、高さが八〇cm、口縁部の直径が八八cmもある。模様も立派であり、同心円や格子など複雑な幾何学文様のほか、取っ手の下には特徴的な木が描かれている。あらゆる点において例外的な製品であり、おそらく墓標として置かれていたものではないかと推測されている<sup>⑬</sup>。

さらにこの部屋から出土した重要資料として、南東のすみから長方形の土製容器(箱)が発見された。大きさは一・三×〇・七五メートルで、灰や焼かれた骨片などが入れられていた。大半は何の骨かは不明であるが、二片はヤギのものとして判明している<sup>⑭</sup>。またこの土製容器の西側からは最大径が一・二〜二七cmという小さなピット(穴)が一・三個発見され、そのうちの三つからもやはり火を受けた骨片が検出された。その中の一つは犬のものであり、犠牲とされた可

能性もあろう。

そして特筆すべきことに、埋葬が行われたすぐあとにヘロオンは全体が埋められて巨大なマウンドが造成された。土や石、日干しレンガなどで意図的に覆われ、マウンドの高さはおそらく四メートル前後に達したと推察されている。丘の頂上に造成されたそれは人目を引く存在であったであろう。覆土から出土した土器から判断して、この作業は埋葬が行われたあと時を経ずして行われたものであるという。ヘロオンから出土した土器はほとんどが中期原幾何学文様期であり、この建物にまつわる一連の出来事はすべて前1000〜950年前後に起こったと推察されている。

そしてそのあとはこの場所が何らかの用途のために使用されることはなく、マウンドに奉納品がささげられることもなかった。したがってその名称にはそぐわず、この建物が「ヘロオン（英雄廟）」として実際に機能した痕跡は存在しない。ただし、すぐ近隣に墓域が造成されていたことは明記しておく必要があるであろう。

ヘロオンをめぐっては、多くの議論がなされてきた。建築学的分析やジェンダーを問題にした論考などもさることながら、やはり最も注目されてきたのは埋葬との関わりや機能についてである。実のところ、埋葬が行われる以前に

既にこの建物が存在したのか、それとも埋葬が行われたあとに建造されたのかという点に関しても、層位など考古学的データから判断することは不可能であり、ヘロオン及びそこでの埋葬にまつわる一連のできごとに関しては個々の研究者の解釈にその多くがゆだねられている。また元来埋葬に関する施設として建造されたのか、それとも他の用途で使用されていた建物が転用されたのか、ということなども議論の対象とされてきた。

発掘を行った研究者の中でも意見が分かれており、イギリスチームを率いたM・ポツパムは埋葬が先に行われたという意見をとる一方で、試掘を担当したギリシア人考古学者P・G・カリガスは住居がのちに埋葬のために用いられたという意見を提出している。他の研究者も議論を行ってはいるが決定的な証拠は存在せず、今もって諸家の間で見解の一致はみられていない。

発掘報告によればヘロオンは床がほとんど踏み固められておらず、埋葬が行われた以前に長期にわたって使用されていた形跡がない。それのみならず、この建物は完成していなかつた可能性もある。したがってもしも居住されていた時期があつたとするならばそれはごく短期間であり、または家屋として建造されている途中（おそらく最終段階）で埋葬が行われることになつたとも想定できよう。

そのような可能性を完全に否定することはできないが、しかし、当時この一帯は居住ではなく埋葬のために使用されていたことを考えると、筆者にはヘロオンが元来は家屋であったという意見に説得的な根拠を見出すことができない。人々の住生活の拠点であったクセロポリスから離れて、集落の指導的立場にあったと思われる人物の家屋のみが埋葬のための一帯に孤立した状態で営まれていたということは、想定することに大きな困難を感じざるを得ない。もしも埋葬よりも先に建造されていたのであるならば、むしろ以下の二つの可能性の方が妥当ではないか。一つ目は当初から埋葬およびその儀式に関連するものであったという可能性、二つ目は別の目的で建造されたあと埋葬に転用された場合であるが、その際には宗教か信仰に関わる建物であったのではないか。<sup>17)</sup>

また見逃してはならないことに、火葬の骨壺や近東のネックレス、さらにはミケーネ時代のファイアンス製ビーズがもしも先祖伝来の品であった場合には、それらを埋葬または副葬に使用したということは次の世代に伝えることを選択しなかったということである。これはI・レモスが指摘しているように、この集落における新しい出発を示唆していると思われる。<sup>18)</sup> この時期レフカンディでは、集落内部で政治的または社会的に大きな変化が発生したのではな

いか。いずれにせよヘロオンにまつわる一連のできごとは、レフカンディの人々にとつて集落全体に関わる大事業であったことは間違いない。

先にも記したように決定的な証拠が存在しないため、ヘロオンおよび二人の埋葬をめぐる解釈には結論を出すことが難しい。埋葬のあとに建造されたという意見を提出したポツパムは、カリガスおよび自らの意見双方ともに問題があると記しており、実際にそうであろう。<sup>19)</sup> 今のところ筆者にはポツパムの意見を完全に否定する材料も、逆に全面的に肯定するだけの確実性も見出すことができない。一方でもしも埋葬よりも先に建立されたのであるならば、現今の資料状況では家屋であった可能性は低いように感じられる。<sup>20)</sup>

### (3) 墓域

現代のレフカンディの市街地周辺が初期鉄器時代の墓域が広がっていた地域であり、幾つかの調査区が発掘されている(図11)。ヘロオンの東隣りのトウンバ、その東方のパリア・ペリヴォリアとそれに隣接する「東の墓域」、その北側にあるスクブリス、ほかにハリオテイスや「南の墓域」などから資料が発見されている。<sup>21)</sup> これらはいくまで現代の調査区に基づく名称であり、初期鉄器時代にこのよう

に埋葬場所が区分けされていたことを示唆するものではない。<sup>⑧</sup>

墓制および埋葬方法について簡単に記しておく、初期鉄器時代のレフカンデイにおいては石板や礫で四方を囲む石棺墓 (cist grave)、長方形の竪穴<sup>⑨</sup>ある土壙墓 (shaft grave)、しばしば不整形の穴が掘られただけのピット墓 (pit grave) など、幾つかの種類の墓が発見されている。<sup>⑩</sup>土葬も火葬も行われていたが、総じて遺骨の残存状況が悪い。<sup>⑪</sup>一方で副葬品は豊富に出土しており、時期による違いはあるが金やファイアンス、ガラス製品がある程度発見されていることは大きな特徴と言えよう。<sup>⑫</sup>また他地域からの搬入品も多く、それらに関しては次章にて代表的なものを紹介したい。

上記の調査区の中で、とりわけ注目されているのはおそらくトゥンバであろう (図12)。ヘロオンのすぐ東側に形成された墓域で、マウンドが造成されてから埋葬のために使用されるようになった。<sup>⑬</sup>まだ完全には発掘されていないので今後その数は増加するであろうが、それでも二〇〇七年に発表された業績の中で八三基の墓と三四の火葬用の薪の痕跡が発見されたと記されている。<sup>⑭</sup>当然のことながらヘロオンとの関係が密にあると考えられており、この場所に埋葬された人たちは集落の中でもエリート階層に

属すると推察されている。それは副葬品の豊かさからも肯定されるところであり、他の調査区に比べてトゥンバは副葬品が豪華で厚葬の傾向が強い。東方からの搬入品も多く、明らかにこの被葬者たちが富裕層またはエリート層に属していたことを示唆している。さらには、富や高い社会的立場を示唆すると思われる馬(トゥンバ第六八号墓)や青銅製の火葬骨壺(トゥンバ第七九号墓)のように、ヘロオンの資料を想起させるような事例も報告されている。先に記したようにヘロオンを覆ったマウンドにはその後奉納品が捧げられるようなことはなかったが、集落の富裕者またはエリート層はそれとの関わりを強調することにより自らの地位を誇示していたと言える。<sup>⑮</sup>

このトゥンバのみならずレフカンデイ出土の副葬品の中でも最も有名な遺物の一つに、頭部が人間で胴体が四足の動物という土製像がある (図13)。一般に、神話に登場する半人半馬のケンタウロスと解釈されている。一九六九年にトゥンバから出土したもので、時期はおそらく原幾何学文様期の後期、実年代で言うと前一〇世紀後期また前九〇〇年前後と推測されるであろう。土製像としては大型のものであり、高さは四六cm前後もある。<sup>⑯</sup>胴部は中空で右手の指は六本、一方で左手は残っていないが、前に出ていると判断されるため、枝か何かを持っていたのではないかと

と推察されている。何よりも注目されたことはその出土状況で、頭部は第一号墓から、それより下の部分は三メートルほど離れた第三号墓から出土した。残念ながら一号墓からは一切の遺骨が発見されず、一方の三号墓には少量の遺骨が残っていただけであり、両者ともに被葬者の年齢を確定することはできない<sup>⑧</sup>。

このケンタウロス像に関しては、様々な解釈がなされてきた。ホメロスにも登場するケンタウロス族のケイロンは賢者として名高く、医薬の知識も持ち合わせていたとされる(『イリアス』第四卷二一六・二一九)。またアキレウスの師としても描写されていることから(『イリアス』第一卷八二九・八三二)、教育者としての要素も持ち合わせていたと言えよう。これらを踏まえて、初期鉄器時代における土器の図柄や造形作品を従来にはない視点から分析を加えて大きな反響を巻き起こしたS・ラングドンは、レフカンディのケンタウロス像についても独自の見解を提出している。ラングドンは初期鉄器時代におけるケンタウロスに関する資料を分析した上で、おそらく男性が成人していく過程に行われた儀礼行為と関わりがあるのではないかという仮説を立てる。そしてレフカンディのケンタウロス像が発見された二つの墓の被葬者の関係に関しては、かかる儀礼行為においてケンタウロスに象徴される指導する側

(initiator)とその手ほどきを受ける若者(imitate)であったのではないかと推測している。ラングドンの意見には決定的な証拠は存在せず、また上記のように二人の被葬者ともにその年齢が不明であることから傍証も得られることはないが、一つの解釈としては示唆的であると言えるであろう<sup>⑨</sup>。

二〇〇六年にはクセロポリスから、おそらくトゥンバのケンタウロス像の二倍の大きさがあると思われる別のケンタウロス像の頭部が発見された<sup>⑩</sup>。また二〇〇四年にはやはりクセロポリスから頭部と胴部上部のみの土製像が出土しており、トゥンバのケンタウロスとの比較も行われている<sup>⑪</sup>。このような新たな遺物もまじえて、この資料に関しては今後も様々な検討が行われていくであろう。

ところでレフカンディの墓域をめぐる大きな問題の一つに、前九世紀が終わりを迎える前に使用されなくなることがある。クセロポリスではその後も居住が継続されており、後期幾何学文様期の資料も出土している。なぜ墓域の方が一世紀も早く使用が認められなくなるのか現段階では不明である。内紛で集落から追われた人たちが存在したのではないかという仮説も提示されているが、今のところは今後の調査に望みを託す以外にはほかはないであろう<sup>⑫</sup>。

## 第6章 初期鉄器時代 ② 対外関係

初期鉄器時代におけるレフカンデイの対外関係は、述べるまでもなく、エウボイアの海上活動や交易という大きなテーマの一環として論じられてきた。それにはアル・ミナに代表される東地中海一帯およびピテクーサイに代表される南イタリアやシチリアなどの広範囲の資料を視野に入れて検討する必要がある、明らかに本稿の射程を超えるものである。したがってここでは、今後の足がかりとすべく、レフカンデイ出土の搬入資料を若干紹介することにとどめたい。

またこの問題に関しては、レフカンデイ出土のエーゲ海北方地域の土器をめぐる論考およびクレタやエトルリアとの関係に関する業績などもあるが、以下、とりわけ重要であるアッティカと東地中海周辺に焦点を絞りたい。

### (1) アッティカ

アッティカの土器はレフカンデイから多数出土しており、第1章においても記したように、それはこの遺跡の土器の編年体系を確立する際に大いに役立ってきた。たとえば、トゥンバの墓域で発見された著名な土器（ピュクシス）で特徴的な船の図柄が描かれたものがあるが（図14）、こ

史苑（第七七巻第二号）

の土器の年代が前八五〇〜八二五年と判断された根拠も、一緒に出土したアッティカの中期幾何学文様期の土器にある。このピュクシスが出土した調査は一九八六年、それに焦点を当てた業績が発表されたのは一九八七年である。ということはレフカンデイの調査開始から二〇年以上の歳月が、そして報告書第一巻（*Lefkandi I*）の公刊からも何年もの年月が経過しており、調査チームには既に在地土器に関する相当程度の知識が蓄積されていたであろう。それでもアッティカの土器が年代決定に大きな役割を果たしたということは、その価値がいかに揺るぎないものであるかよく物語っている。

またアッティカからの搬入土器のみならず、それを模した在地の土器も出土しており、初期鉄器時代のレフカンデイにおいて、いかにアッティカ製の土器が尊重されていたかが顕著に見て取れる。

このように両者が密接な関係を保っていたことは明らかであるが、とりわけ注目すべきは、レフカンデイの集落にはアッティカからの移住者がいたのではないかと推察されていることである。かかる意見は研究史上比較的早くから提出されており、既に報告書第一巻（*Lefkandi I*）が出版される以前に指摘されている。単に移住というのみならず、M・ポップムはアテネ人とエウボイア人が結婚した可能性

をも推測している<sup>⑭</sup>。さらに、J・N・コールドストリームもそれを肯定しているが、骨壺が二つ発見されたトゥンバ第一四号墓に関してはアテネ人同士の夫婦ではないかも推察している<sup>⑮</sup>。

なぜアツティカから移住してきた人々がレフカンディに居住していたという意見が提出されるのかというと、その理由は特別な埋葬方法にある。火葬の骨壺を堅穴に埋納するという典型的なアツティカ方式の葬制が発見されており、それがアツティカからの移住者の存在を想定する根拠となっている。アツティカの埋葬方法を模した現地の人々の墓とも解釈でき、決定的な証拠は存在しないが、アツティカからの移住者が存在した可能性は排除できない。

またレフカンディから出土しているアツティカ製の土器または土製品の中には、一般の交易でもたらされたとは思われない特殊なものが含まれている。たとえばトゥンバの墓域から出土した中期幾何学文様期のアツティカ製土器の中には大型のものが含まれており、高さが五八cmもあるピュクシス(図15上)や四七・五cmもあるクラテール(図15下)が報告されている。これだけの大きさになると輸送には特別な注意が払われたと思われる、またこの二つの土器は文様も精緻で立派であることから、単なる交易品ではない可能性が推察される。さらには、玩具と推察される車輪

がついた馬型像(図16)など、大量生産ではないと考えられる土製品も同様に解釈されよう。これらの遺物がアツティカからもたらされた背景には、エリート階層同士の結びつきなど、何らかの特別な関係が想定される<sup>⑯</sup>。

レフカンディの人たちにとって卓越した技術力を誇ったアツティカの土器は、憧れでもありステータスシンボルでもあったと言えよう。一方でアツティカの人たちはレフカンディにどのような魅力や長所を見出していたのであろうか。青銅製品またはその製作技術であろうか。コールドストリームは東方からアツティカの土器が出土するときは常にエウボイアの土器も一緒に伴われていると指摘し、アツティカの土器が交易の品としてエウボイアの船で運搬された可能性を推察しているが、氏自身が幾つかの問題点を記している上に、研究者の間で意見が分かれる問題なので、この説に関しては慎重な検討が必要であらう<sup>⑰</sup>。いずれにせよアツティカとレフカンディとの関係に関してはより具体的な実態の解明が求められる。

## (2) 東地中海周辺

レフカンディからは東地中海方面からの搬入品が多量に出土しており、エウボイアの海上活動や交易という大きなテーマの一環として盛んに議論されてきた。

かかる遺物の中でも最も有名なものの一つに、近東で製作されたと推察されている二個の青銅製の鉢(ボール)がある。両方ともトウンバの墓域から出土したもので、一つは第五五号墓から、もう一つは第七〇号墓から発見された。

第五五号墓の鉢の図柄は、上段がヘルメットをかぶったグリフィンまたはスフィンクス、また下段には動物やシュロの木が描かれている(図17)。墓の年代は原幾何学文様期の後期である。一方の第七七号墓の方は口縁の直径が一四・五×一五・五cm、高さが五・五cmで、残存状況が悪いが、スフィンクスのような想像上の生き物や供え物を運んでいる女性たちが描写されている(図18)。墓の年代はやはり後期原幾何学文様期で、実年代では前九〇〇年前後という報告がある。これらの鉢の生産地に関しては、両者ともにおそらくシリアの北方地域ではないかと推測されている。

またエジプト製かまたはそれを模倣したフェニキア製かと議論がある遺物も出土しており、ギリシア世界以外とレフカンディとの関係については地中海全域を視野に入れた議論が求められている。

その中でも何よりも問題となることは、これら地中海周辺各地からの品々をレフカンディの集落にもたらしたのは誰であったのか、そしてそれは交易か、またはエリート階層同士の威信財の交換であったのか、どのような経緯によ

るものなのか、ということであろう。誰によるものかという点に関してさえ、レフカンディを含むエウボイアの人たち、フェニキア人、もしくはキプロス人など、研究者の間で統一した見解は得られていない。

個々の遺物(の種類)によりレフカンディへの搬入の経路および経緯が異なる可能性もあろう。またこのような問題は、南エウボイア湾の他遺跡、そしてキプロスやアル・ミナを中心とするシリア、さらにはフェニキアなど東地中海一帯の資料をまじえて慎重に吟味する必要がある。さらにはレフカンディの集落に東地中海方面からの移住者が存在していたのか否かという点も議論されており、レフカンディと地中海周辺各地との関係に関しては今後も多角的な分析が行われていくことであろう。

## おわりに

ミケーネ時代には広範な周辺地域をその影響下に組み込んでいたポイオティアのテーベが、ミケーネ文化の崩壊にともない、その勢力を減退させるのと呼応するかのようになり、レフカンディは後期青銅器時代ⅢC期に繁栄を謳歌するようになる。この時期のレフカンディの人々は、おそらく過去にこだわらずに社会を変化そして発展させていくような

傾向を有していたのではないか。そしてⅢC期には、既に青銅製品の製作が行われていた。

おそらくその技術を継承したと思われる初期鉄器時代の人々は、同様に青銅製品の生産を展開し、さらには海上活動にも関わりを持ち、当時のギリシア世界において稀に見る富裕で栄えた集落へとレフカンディを成長させた。埋葬資料には金製品なども多く含まれており、他地域には見られない華やかさを顕著に映し出している。

また前一〇世紀にはヘロオンにおける埋葬およびマウンドの造成が行われたが、そのころレフカンディの集落は政治的および社会的に大きな転換期を迎えたのではないか。そしてその後ヘロオンのすぐ近隣に形成されたトゥンバの墓域は他の埋葬地に比べて豪華な副葬品を伴っており、集落内部に富裕者またはエリート階層とも言うべき人々が存在したことを示唆している。これらの人々はヘロオンとの関係を強調そして誇示しながら、集落を統率ないしは導くような立場にあったと言えるであろう。

初期鉄器時代のレフカンディはアッティカ(おそらくアテネ中心部)とも密な関係を保ち、活気に満ちた集落であった。繁栄を極めたレフカンディではあるが、初期鉄器時代の終わり、おそらく前七〇〇年前後を境にほとんど居住されなくなる。カルキスとエレクトリアとの間で戦われたレラ

ントス戦争がその原因ではないかと推察されることが多いが、確実な証拠は存在しない<sup>16)</sup>。

ただしクセロポリスにおいては一九六〇年代の調査でも前古典期の資料が発見され、また二〇〇三年以降の発掘でも前七世紀に入ってから居住が認められている<sup>17)</sup>。したがって、ただちに完全に放棄されたわけではない。それでも前古典期以降この集落がポリスへと発展していくことはなく、その役目は終焉を迎えていった。

私見ではあるが、初期鉄器時代におけるレフカンディの繁栄を実現させた重要な要素として、二つの点を強調しておきたい。一つは後期青銅器時代ⅢC期の社会の在り方である。ティリンスと同様に、ミケーネ文化崩壊後のこの時期に社会を建てなおしていく傾向が顕著に見られることは、のちの初期鉄器時代の運命を大きく左右するものであったのではないか。二つ目は、青銅製品の生産という独自の産業を有していたことである。アテネ中心部の初期鉄器時代における繁栄には土器の生産が大きく影響していたと思われるが、このように他には存在しないうぐれた独自の技術および産業は、その集落の繁栄を大きく促すものであったと言える。レフカンディの場合には青銅製品の製作技術をⅢC期の人たちから継承した可能性が高いため、ここで記した二つの要素は密接なかかわりを有していたこ

とになる。

レフカンディは初期鉄器時代研究にとって筆頭と言っても過言ではない重要性を有する遺跡である。膨大な資料が発掘されており、しかもそれはますます増加していくであろう。時代像全体の構築を目指すためにも、今後もレフカンディの資料に注目していきたい。

## 註

- (1) *Lefkandi* II.2, Preface, ix.
- (2) 二〇一四年の業績の文献一覽について、forthcoming」として記載されている (Lemos 2014b, 58)。また二〇〇六年の業績の中で *Lefkandi* III.2 が予告されている (Lemos 2006a, 523, n.59)。
- (3) cf. *Lefkandi* I, Appendix B, 423-427.
- (4) この調査成果におけるレフカンディに関する記述に関しては、Sackett, Hankey, Howell, Jacobsen & Popham 1966, 60-61。
- (5) 概報や一般向けの業績として、たとえば Popham & Sackett 1968, Sackett & Popham 1972, Popham, Touloupa & Sackett 1982a, Kourou 1992。
- (6) Whitbread & Livieratos 2012, Whitbread 2014, やつにレフカンディの土器に関する科学的分析として、Lemos 2014b。
- (7) Livarda & Kotzamani 2006.
- (8) *Lefkandi* I, 11.
- (9) Davidson, Wilson, Lemos & Theodoropoulos 2010. 報告書におけるテルとごう言葉の使用例として、*Lefkandi* IV, 1。
- (10) クセロポリスを「岬の突端に生じた人工の丘」と記している文献があるが、適切な表現とは言えない (馬場恵二『ビジュアル版世界の歴史3—ギリシア・ローマの栄光』講談社、一九八四、一〇八)。報告書ではクセロポリスの描写に“plateau”という言葉がしばしば使用されている (たとえば、*Lefkandi* I, 1, *Lefkandi* IV, 303 など)。

- (11) 初期および中期青銅器時代に関する詳細な報告は未発表である。 Cf. Popham & Sackett 1968, 6-11, *Lefkandi I*, 6-7.
- (12) *Lefkandi IV*, 9, 304.
- (13) *Lemos 2006a*, 517.
- (14) *Lefkandi IV*, 87-92, 304.
- (15) *Sapouna-Sakellarakı 1995*.
- (16) *Lefkandi I*, 101-102.
- (17) *Lefkandi I*, 12, 49-52, *Lemos 2006a*, 525, n.66.
- (18) 桜井万里子はクセロポリスを「近接の集落遺跡」と記し、レフカンディとは別個の遺跡として扱っている (『ポリス成立前夜の社会—レラントス戦争の検証』歴史学研究会編『史料から考える世界史二〇講』岩波書店, 二〇一四, 二六)。クセロポリスがレフカンディの一部であることは研究者の間で広く認められており、我が国においても既に一九八〇年代にクセロポリスの写真がレフカンディとして紹介されている (馬場恵二註10文獻, 一〇八)。クセロポリスを別個の遺跡ないしは集落と見なすとすると、レフカンディを論じの際にクセロポリスの資料は除外することになる。さらには両者の関係も問題になり、広範な事柄に甚大な影響が及ぶ。ここまで大きく通説から逸脱することを記すのであるならば、述べるまでもなく、相応の根拠を提示する必要がある。
- (19) Popham & Milburn 1971, Musgrave & Popham 1991. ちゃんに表面採集されたⅢC期の土器片に関する業績として、Cattling 1968. ほかにこの時期に関する記載がある文献として、Popham & Sackett 1968, 11-23, Sackett & Popham 1972, 13-14.
- (20) 報告書によればこの三つの時期区分は、よくおおまかに言えば、それぞれ後期青銅器時代ⅢC期の初期、中期、後期に相当する (*Lefkandi IV*, 303)。  
この点に関するA・マウンテンジョイの意見に関しては、Mountjoy 1999, 38-40。また、そのマウンテンジョイの意見に従って、ⅢC中期のレフカンディに焦点を当てた論考の中で、第一期の後半 (1a) 期と第二期の前半期 (2a) が扱われつつある (Schöföeld 2007)。
- (21) *Lefkandi IV*, 8-42, 305.
- (22) *Lefkandi IV*, 305-306.
- (23) *Lefkandi IV*, 43-75, 306-307.
- (24) *Lefkandi IV*, 43-75, 306-307, CD-3-19, ちゃんにクセロポリス出土の初期鉄器時代の同様の事例として、*Lemos 2012a*.
- (25) ⅢC期の墓に関するわずかな資料として、墓域から出土した後期青銅器時代ⅢC期もしくは亜シケーネ期初期の土器に関する報告があり、石棺墓の可能性が指摘されている (*Lefkandi I*, 313, 355, *Lemos 2006a*, 518-519)。
- (26) *Lefkandi IV*, 1, 75, 306.
- (27) *Lemos 2007c*, 124.
- (28) *Lefkandi IV*, 1, 第三期の建造物に関するちゃんは、*Lefkandi IV*, 75-87, 307。
- (29) 二〇〇三年以降の調査に関しては、cf. *Lemos*, 2004, 2005a, 2006b, 2007b, 2007c, 2008, 2009, 2010a, 2010b, 2014a, esp. 171-173 ちゃんに cf. Mitchell & Lemos 2011。
- (30) Mountjoy 1993, 139, ⅢC期のレフカンディの土器に関するとして、*Lefkandi IV*, chap. 2, 3 のほかに、cf. Mountjoy 1999, 711-722。

- (31) *Lefkandi IV*, 254, G1.  
 (32) レフカンディ出土の絵画様式に関する論考として、たと  
 えば、Rutter 2014°。  
 (33) *Mitaulu* と *レフカンディ* の土器に関する研究として、  
 Rutter 2007°。 *Mitaulu* については、拙稿「ギリシアの  
 初期鉄器時代に関する調査および研究動向 二〇一〇〜  
 二〇一四」『史苑』第七六卷第二号、二〇一六、三三三-三三六。  
 (34) *Lefkandi IV*, 308.  
 (35) *Lefkandi IV*, 277-278.  
 (36) *Lefkandi IV*, 42, 308.  
 (37) *Lefkandi IV*, 294, 308.  
 (38) *Lefkandi IV*, 62, no.16, 282-284, 290, 308.  
 (39) *Lefkandi IV*, 282, 288, 307-309.  
 (40) テーグに関する概説として、cf. Dakouri-Hild 2010°。  
 (41) テーグで発見された線文字B文書に記載されている地名  
 に関しつは、cf. Crielaard 2006, 275, fig.14.1 (a), 277°。  
 (42) *Lemos 2006a*, 517.  
 (43) *Lemos 2010b*, 136.  
 (44) *Lemos 2007c*, 127.  
 (45) ミケーネとティリンスのⅢC期の状況に関しては、拙稿「青  
 銅器時代終末期におけるティリンスー建造物Ⅰ」、「ティリン  
 スの宝物」、クレタ製粗製鍍壺に関する資料紹介」、「西洋  
 史研究」新輯第四三号、二〇一四、「一三八-一五一」、「青銅  
 器時代終末期におけるシケーネ」『西洋史研究』新輯第四四  
 号、二〇一五、七五-九〇、特に八六-八七。  
 (46) *Lefkandi I*, esp. 209, 283, 355-356, *Lemos 2006a*, 519.  
 (47) *Lefkandi I*, 355.  
 (48) *Lemos 2004*, 39, 2007c, 124.  
 (49) *Lemos 2006a*, 519. *ヤムド*° *Lemos 2007c*, 124, 127°。  
 (50) Toffolo, Fantalkin, Lemos, Felsch, Niemeier, Sanders,  
 Finkelstein & Boaretto 2013.  
 (51) *Lefkandi I*, 14-15, 23-24.  
 (52) *Lefkandi I*, section 2, 11-25.  
 (53) *Lefkandi I*, 17.  
 (54) *Lefkandi I*, 19.  
 (55) 二〇〇三年以降の調査に関しつは、cf. *Lemos, 2004*,  
 2005a, 2006b, 2007b, 2007c, 2008, 2009, 2010a, 2010b°。  
*ヤムド*° cf. Mitchell & Lemos 2011, *Lemos 2012a*, *Lemos*  
 2014c°。  
 (56) *Lefkandi II*, 2, 6.  
 (57) Cf. Sackett 1982.  
 (58) 馬と人間の遺骸は別の部屋から出土したと記している文  
 献があるが、同じ部屋である(椀井、註18文献、二四)。時  
 間的にも空間的にも密接な関係を有する状況の中で、両者  
 は埋められたと思われる°。  
 (59) *Lefkandi II*, ix, 19-20.  
 (60) *Lefkandi II*, 81-96.  
 (61) *Lefkandi II*, ix, 21-22.  
 (62) *Lefkandi II*, 20, *Lemos 2002*, 131-132. 図版は、Popham,  
 Touloupa & Sackett 1982, 172, pl. XXIII (b)°。  
 (63) *Nightingale 2007*, 422.  
 (64) 墓壇の覆土が均一であり二つの埋葬が同時に行われたよ  
 うに見えるが、二度目の埋葬で全体を掘り出して埋め戻し  
 た可能性もあるため、それは二人の被葬者が同時に埋めら

- れたという理由にはならない」という報告書の指摘は正鵠を射てゐる (Lefkandi II.2, 21)。
- (65) Lefkandi II.2, 17-22, Lemos 2002, 167. ややに、女性の手足が縛られていた可能性も指摘されている (Lefkandi II.2, 21)。
- (66) Lefkandi II.1, 25-26, Lefkandi II.2, 16, Lemos 2002, 48-49.
- (67) Lefkandi II.2, 15.
- (68) Lefkandi II.2, 15, 99.
- (69) 一九八一年の時点でニメートル前後保存されていたという (Lefkandi II.2, 55)。マウンドの形状であるが、カリガスは底面が円形のものである (Calligas 1988, 231, fig.1)。レモスは全体がかまぼこ型になるように復元してゐる (Lemos with Mitchell 2011, 642-644, figs.2-7)。なぜか後者の方が妥当なのではないか。
- (70) Lefkandi II.2, 29-31, 52-56, 97-101.
- (71) De Waele 1998, Pakkanen & Pakkanen 2000, Pakkanen 2004, Herdt 2015.
- (72) Harrell 2014.
- (73) Lefkandi II.2, 99-100. ややに報告書がこの建物の建築学的分析を担当した J・クルトンの意見として。cf. Lefkandi II.2, 49.
- (74) Calligas 1984-1985, esp. 266, 1988, 232. このカリガスの意見に関する批判として。cf. Lefkandi II.2, 101.
- (75) この問題に関する一言及がある業績として、Crielaard & Driessen 1994, Antonaccio 1995, Mazarakis Ainian 1997, 48-58, Lemos 2002, 140-146, 166-168\*。
- (76) Lefkandi II.2, 97-98.
- (77) J・クルトンは初期鉄器時代でも比較的早いこの時期に神殿が建立されたということに疑義を呈し、この建物が神殿である可能性を強くしりぞけているが (Lefkandi II.2, 49)、必ずしも説得的な見解とは言えないであろう。また I・モリスも試みているが、神殿の起源という問題とも関連づけられて論じられてきたテルモン (テルモス) との比較などにも有益かもしれない (Morris 2000, 222-228)。これは初期鉄器時代における宗教や神殿の発展という大きなテーマとかかわりがある問題であり本稿の目指すところからは逸脱するため、詳細な検討は他日を期すこととした\*。
- (78) Lemos 2002, 168.
- (79) Lefkandi II.2, 101. ややに I・レモスはヘロオンの発掘に携わった者として、ポップムの意見の方が妥当性があるように思われると記している (Lemos 1998, 54, cf. Lemos 2002, 146)。この時代に関して第一級の知識と調査経験を有する研究者の現場を踏まえての感覚や直感はずしも無下に扱うべきではないように感じる。
- (80) 桜井万里子は「居住していた家屋が男性の死後に墓として使用されたであろう」と記しているが、その根拠はどのようなものであるのか (桜井、註18文献、一四)。
- (81) レフカンディの埋葬資料に関する発掘報告は、Lefkandi I トウンズに関してはややに Popham, Touloupa & Sackett 1982b, Popham, Calligas & Sackett 1989, Lefkandi III\* 2002, 161-166\*。またギリシアの考古局による緊急発掘も行われている。たとえば一九九九年に行われた調査の一つで

は火葬の痕跡が出土しており、パリア・ペリヴォリアとの関係が示唆されているが、残念ながら年代が記われておらず、初期鉄器時代か否かも不明である (AdeI 54, Chronika (1999) B.1, 2005, 339-340)。

(83) 墓の種類については、*Lefkandi I*, 197-207。

(84) 埋葬方法に関しては、*Lefkandi I*, 209-216。遺骨が残っていないという問題に関する関連文献としては、Catling 1985。

(85) 金・ブアイアンス・ガラス製品に関しては、*Lefkandi I*, 217-230。この点は、アテネ中心部のアモラの副葬品と比較すると、顕著な違いである。アモラからこのような副葬品が出土することは、極めて例外的である (拙稿「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡(一)アテネのマモラ」『史苑』第七二巻第一号、二〇一一年、表一、一三八-一五七)。

(86) *Lefkandi II*, 2, 9, 99。

(87) *Lemos 2007a*, 276。

(88) Cf. Popham 1994。

(89) トウンズ第十六号墓からは馬が二頭発見された (*Lefkandi III*, pl.22, 35, cf. *Lemos 2002*, 166)。

(90) Popham & Lemos 1995。

(91) *Lemos 2007a*, Lemos with Mitchell 2011。

(92) レモスの記述に従った (*Lemos 2002*, 98, n.328)。36 頁に記してある文献も参照 (Desborough, Nicholls & Popham 1970, 21, 24)。

(93) Desborough, Nicholls & Popham 1970, *Lefkandi I*, 168-170, 215-216, 344-345, *Lemos 2002*, 98-99。

(94) Langdon 2008, 71-72, 89, esp. 108。ニンズマンの著作

に関しては、拙評「S. Langdon, *Art and Identity in Dark Age Greece, 1100-700 B.C.E.*」『古代文化』第六四巻第四号、二〇一三年、一五三-一五五。

(95) *Lemos 2007b*, 40。

(96) *Lemos 2006c*。

(97) *Lemos 2012a*, 170。

(98) この問題に関しては、*Lefkandi I*, 367-369, *Lemos 2006a*, 523。クセロポリスから後期幾何学様期の土葬墓と土器棺墓が発見されたが、それは当該期の数少ない事例であり、レフカンドイの墓制および埋葬習慣を考える上で重要な資料である (*Lemos 2012a*)。

(99) Catling 1996, *Lemos 2001*, esp. 216-218, 2012b。これは重要なテーマである。J・K・バンドプロスの見解も含めて (拙稿「ギリシアの初期鉄器時代に関する調査および研究動向二〇〇〇〜二〇〇九年」『地中海学研究』三三・一・一〇九-一〇一)、『活発な議論が求められる』

(100) Lebeszi 1996。

(101) Ridgway 1997。

(102) Popham 1987。この土器の図版については、*Lefkandi III*, pl.94。

(103) アッティカ製土器の模倣と在地土器との関係については、cf. *Lemos 1996*。

(104) Desborough 1976, 33。

(105) Popham 1994, 28。

(106) Coldstream 1996, 139, 2007, 138。

(107) *Lefkandi I*, 175-176 (T.14), 177 (T.18), Popham, Calligas & Sackett 1989, 118 (T.50)。

- (10) Goldstream 2004.
- (10) Cf. Goldstream 1996, 139-142, 2007, 138-139.
- (11) Goldstream 1996, 142.
- (11) Popham, Calligas & Sackett 1989, 118, 121, Popham 1994, 17-21, 1995.
- (12) Popham 1994, 17-22, Carter 1998.
- (13) Lemos 2003. *αυτοψία* cf. Goldstream 1998, 356, 2007, 137°
- (14) 関連文献として Lemos 1992, 2001, esp. 218-222, 2005b°
- (15) Λιόντες 戦争に関する参考文献として Hall 2007, 1-8°
- (16) *Lefkandi I*, 18.
- (17) Lemos 2006a, 523, n.61.

略記一覧

*Lefkandi I*

- M.R.Popham & L.H.Sackett and, with P.G. Themelis eds., *Lefkandi I: The Iron Age—The Settlement, the Cemeteries*, The British School at Athens Supplementary Volume 11, 1979 (Plates) & 1980 (Text).

*Lefkandi II.1*

- M.R.Popham, P.G.Calligas & L.H.Sackett (eds.), with R.W.V.Catling and I.S.Lemos, *Lefkandi II: The Protogeometric Building at Toumba—Part 1: The Pottery*, The British School at Athens Supplementary Volume 22, 1990.

*Lefkandi II.2*

- M.R.Popham, P.G.Calligas & L.H.Sackett (eds.),

with J.Coulton and H.W.Catling, *Lefkandi II: The Protogeometric Building at Toumba—Part 2: The Excavation, Architecture and Finds*, The British School at Athens Supplementary Volume 23, 1993.

*Lefkandi III*

M.R.Popham with I.S.Lemos, *Lefkandi III: The Toumba Cemetery—The Excavations of 1981, 1984, 1986 and 1992-4*, Plates, The British School at Athens Supplementary Volume 29, 1996.

*Lefkandi IV*

D.Evely ed., *Lefkandi IV: The Bronze Age—The Late Helladic IIIc Settlement at Xeropolis*, The British School at Athens Supplementary Volume 39, 2006.

大編一覧

Antonaccio, C.M. 1995: *Lefkandi and Homer*, in Ø.Andersen & M. Dickie eds., *Homer's World: Friction, Tradition, Reality*, Bergen, 5-27.

Calligas, P.G. 1984-1985: *Ανασκαφές στο Λευκαντί Ευβοίας, 1981-1984, Αρχαίον Ευβοϊκών Μελετών* 26, 253-269.

— 1988: *Hero-Cult in Early Iron Age Greece*, in R.Hägg, N. Marinatos & G.C.Nordquist eds., *Early Greek Cult Practice: Proceedings of the Fifth International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 26-29 June, 1986*, Stockholm, 229-234.

- Carter, J.B. 1998: Egyptian Bronze Jugs from Crete and Lefkandi. *JHS* 1998, 172-177.
- Catling, H.W. 1968: A Mycenaean Puzzle from Lefkandi in Euboea. *AJA* 72, 41-49.
- 1985: The Arrangement of Some Grave Goods in the Dark Age Cemeteries of Lefkandi. *BSA* 80, 19-23.
- Catling, R.W.V. 1996: A Tenth-Century Trade-Mark from Lefkandi, in Evely, Lemos & Sherratt eds. 1996, 126-132.
- Coldstream, J.N. 1996: Knossos and Lefkandi: The Attic Connections, in Evely, Lemos & Sherratt eds. 1996, 133-145.
- 1998: The First Exchanges between Euboeans and Phoenicians: Who Took the Initiative?, in S.Gitin, A.Mazar & E.Stern eds., *Mediterranean Peoples in Transition: Thirteenth to Early Tenth Centuries BCE*, Jerusalem, 353-360.
- 2004: A Protogeometric Toy Horse from Lefkandi, *Mediterranean Archaeology* 17, 1-5.
- 2007: Foreigners at Lefkandi?, in Mazarakis Ainiad ed. 2007, 135-139.
- Crielaard, J.P. 2006: *Basileis at Sea: Elites and External Contacts in the Euboean Gulf Region from the End of the Bronze Age to the Beginning of the Iron Age*, in Deger-Jalkotzy & Lemos eds. 2006, chap. 14, 271-297.

- Crielaard, J.P. & J.Driessen 1994: The Hero's Home: Some Reflections on the Building at Toumba, Lefkandi. *Topoi* 4, 251-270.
- Dakouri-Hild, A. 2010: Thebes, in E.H.Cline ed., *The Oxford Handbook of the Bronze Age Aegean (ca. 3000-1000 BC)*, Oxford, chap. 52, 690-711.
- Davidson, D.A., C.A. Wilson, I. Lemos & S.P.Theocharopoulos 2010: Tell Formation Processes as Indicated from Geoarchaeological and Geochemical Investigations at Xeropolis, Euboea, Greece. *Journal of Archaeological Science* 37, 1564-1571.
- Deger-Jalkotzy, S. & I.S.Lemos eds. 2006: *Ancient Greece: From the Mycenaean Palaces to the Age of Homer*, Edinburgh Leventis Studies 3, Edinburgh.
- Deger-Jalkotzy, S. & M.Zavadil eds. 2007: *LHIIIC Chronology and Synchronisms II: LHIIIC Middle—Proceedings of the International Workshop held at the Austrian Academy of Sciences at Vienna, October 29th and 30th, 2004*, Wien.
- Desborough, V. 1976: The Background to Euboean Participation in Early Greek Maritime Enterprise, in F.Emmison & R.Stephens eds., *Tribute to an Antiquary—Essays presented to Mark Fitch by Some of his Friends*, Leopard's Head Press, 27-40.
- Desborough, V.R., R.V.Nicholls & M.Popham 1970: A Euboean Centaur, *BSA* 65, 21-30.

- De Waele, J.A.K.E. 1998: The Layout of the Lefkandi 'Heroon', *BSA* 93, 379-384.
- Evely, D., I.S.Lemos & S.Sherratt eds. 1996: *Minotaur and Centaur: Studies in the Archaeology of Crete and Euboea presented to Mervyn Popham*, BAR International Series 638, Oxford.
- Galanakis, Y., T.Wilkinson & J.Bennet eds. 2014: *AΘΥΡΜΑΤΑ: Critical Essays on the Archaeology of the Eastern Mediterranean in Honour of E.Susan Sherratt*, Oxford.
- Hall, J.M. 2007: *A History of the Archaic Greek World, ca.1200-479 BCE*, Massachusetts/Oxford/Victoria.
- Harrell, K. 2014: Man/Woman, Warrior/Maiden: The Lefkandi Tomba Fernal Burial Reconsidered, in Galanakis, Wilkinson & Bennet eds. 2014, 99-104.
- Herd, G. 2015: On the Architecture of the Toumba Building at Lefkandi, *BSA* 110, 203-212.
- Kerschner, M. & I.S.Lemos eds. 2014: *Archaeometric Analyses of Euboean and Aegean Related Pottery: New Results and their Interpretations—Proceedings of the Round Table Conference held at the Austrian Archaeological Institute in Athens, 15 and 16 April 2011*, Wien.
- Kourou, N. 1992: Δευκάντι: Ο Αρχαιολογικός Χώρος του Ερείβδαε των Επικυρησθίουπολιού των Διοκρετιών Χόρων, *Αρχαιολογία* 42, 42-46.
- Kroll, J.H. 2008: Early Iron Age Balance Weights at Lefkandi, Euboea, *OJA* 27 (1), 37-48.
- Langdon, S. 2008: *Art and Identity in Dark Age Greece, 1100-700 B.C.E.*, Cambridge.
- Lebessi, A. 1996: The Relations of Crete and Euboea in the Tenth and Ninth Centuries B.C.. The Lefkandi Centaur and his Predecessors, in Evely, Lemos & Sherratt eds. 1996, 146-154.
- Lemos, I.S. 1992: Euboean Enterprise in the Eastern Mediterranean: Early Import at Lefkandi, *AJA* 96 (2), 338-339.
- 1996: A Euboean Potter/Painter from Lefkandi, in Evely, Lemos & Sherratt eds. 1996, 122-125.
- 1998: Euboea and its Aegean Koine, in M.Bats & B. d'Agostino eds., *Euboeica: L' Eubea e la Presenza Euboica in Calcidica e in Occidente—Atti del Convegno Internazionale di Napoli, 13-16 Novembre 1996*, Napoli, 45-58.
- 2001: The Lefkandi Connection: Networking in the Aegean and the Eastern Mediterranean, in L.Bontante & V. Karageorghis eds., *Italy and Cyprus in Antiquity: 1500-450 BC—Proceedings of an International Symposium held at the Italian Academy for Advanced Studies in America at Columbia University, November 16-18, 2000*, Nicosia, 215-226.
- 2002: *The Protoegeometric Aegean: The Archaeology of the Late Eleventh and Tenth Centuries BC*,

- Oxford.
- 2003: Craftsmen, Traders and some Wives in Early Iron Age Greece, in N.C. Stampolidis & V. Karageorghis eds., *ΠΑΟΕΥ.. Sea Routes... Interconnections in the Mediterranean 16th – 6th c. BC: Proceedings of the International Symposium held at Reihymnon, Crete, September 29th – October 2nd 2002*, Athens, 187-195.
- 2004: Lefkandi, *AR 50* (2003-2004), 39-40.
- 2005a: Lefkandi, *AR 51* (2004-2005), 50-52.
- 2005b: Changing Relationship of the Euboeans and the East, in A. Villing ed., *The Greeks in the East*, The British Museum Research Publication Number 157, 53-60.
- 2006a: Athens and Lefkandi: A Tale of Two Sites, in Deger-Jalkotzy & Lemos eds. 2006, chap. 27, 505-530.
- 2006b: Lefkandi, *AR 52* (2005-2006), 62-63.
- 2006c: A New Figurine from Xeropolis at Lefkandi, in E. Herring, I. Lemos, F. Lo Schiavo, L. Vagnetti, R. Whitehouse & J. Wilkins eds., *Across Frontiers: Etruscans, Greeks, Phoenicians & Cypriots— Studies in Honour of David Ridgway and Francesca Romana Serra Ridgway*, London, 89-94.
- 2007a: “...ἔνει νόρε πύρα ἔδρα...” (Iliad 22.472): Homeric Reflections in Early Iron Age Elite Burials, in E. Alram-Stern & G. Nightingale eds., *Keimelion*, *Ellenbildung und elitärer Konsum von der mykenischen Palastzeit bis zur homerischen Epoche*, Wien, 275-284.
- 2007b: Lefkandi, *AR 53* (2006-2007), 38-40.
- 2007c: Recent Archaeological Work on Xeropolis, Lefkandi: A Preliminary Report, in Mazarakis Ainián ed. 2007, 123-133.
- 2008: Lefkandi, *AR 54* (2007-2008), 51-54.
- 2009: Lefkandi, *AR 55* (2008-2009), 47-49.
- 2010a: Lefkandi, *AR 56* (2009-2010), 87.
- 2010b: The Excavation at Lefkandi-Xeropolis (2003-2008), *Bulletin of the Institute of Classical Studies* 53-2, 134-136.
- 2012a: The Missing Dead: Late Geometric Burials at Lefkandi, *Mediterranean Archaeology* 25, 159-172.
- 2012b: A Northern Aegean Amphora from Xeropolis, Lefkandi, in Π. Αδάμ-Βελένη & Κ. Τζαβαβίση eds., *Ανθησσα: Τημητικός Τόμος για την Κατερίνα Ρομποπούλου*, Θεσσαλονίκη, 177-182.
- 2014a: Communities in Transformation: An Archaeological Survey from the 12th to the 9th Century BC, *Pharos* 20 (1), 161-191.
- 2014b: Pottery from Lefkandi of the Late Bronze and Early Iron Age in the Light of the Neutron Activation Analyses, in Kerschner & Lemos eds. 2014, 37-58.

- 2014c: The Cesnola Painter, Again, in P.Valavanis & E. Manakidou eds., *Essays on Greek Pottery and Iconography in Honour of Professor Michalis Tiverios*, Thessaloniki, 47-53.
- Lemos, I.S. with D.Mitchell 2011: Elite Burials in Early Iron Age Aegean. Some Preliminary Observations Considering the Spatial Organization of the Toumba Cemetery at Lefkandi, in A.Mazarakis Ainian ed., *The "Dark Ages" Revisited: Acts of an International Symposium in Memory of Willian D.E.Coulson, University of Thessaly, Volos, 14-17 June 2007*, Volos, 635-644.
- Livarda, A. & G.Kotzamani 2006: Plant Lore in 'Dark Age' Greece: Archaeobotanical Evidence from Lefkandi, Euboea, Literal Sources and Traditional Knowledge Combined, in Z. Füsün Erteg ed., *Proceedings of the Fourth International Congress of Ethnobotany (ICEB 2005), 21-26 August 2005, Istanbul - Turkey: "Ethnobotany: At the Junction of the Continents and the Disciplines"*, Istanbul, 435-437.
- Mazarakis Ainian, A. 1997: *From Rulers' Duellings to Temples: Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100 - 700 B.C.)*, Jonsered.
- Mazarakis Ainian, A. ed. 2007: *Oropos and Euboea in the Early Iron Age—Acts of an International Round Table, University of Thessaly, June 18-20, 2004*, Volos.
- Mitchell, D.A. & I.S.Lemos 2011: A New Approach in Ceramic Statistical Analyses: Pit 13 on Xeropolis at Lefkandi, in S. Verdán, T.Theurillat & A.Kenzelmann Pfyster eds., *Early Iron Age Pottery: A Quantitative Approach—Proceedings of the International Round Table organized by the Swiss School of Archaeology in Greece (Athens, November 28-30, 2008)*, BAR International Series 2254, 77-88.
- Morris, I. 2000: *Archaeology as Cultural History: Words and Things in Iron Age Greece*, Blackwell.
- Mountjoy, P.A. 1993: *Mycenaean Pottery: An Introduction*, Oxford.
- 1999: *Regional Mycenaean Decorated Pottery*, Rahden.
- Musgrave, J.H. & M.Popham 1991: The Late Helladic IIIc Intramural Burials at Lefkandi, Euboea, *BSA* 86, 273-296.
- Nightingale, G. 2007: Lefkandi. An Important Node in the International Exchange Network of Jewellery and Personal Adornment, in I.Galanaki et al. eds., *Between the Aegean and Baltic Seas: Prehistory Across Borders—Proceedings of the International Conference, Bronze and Early Iron Age Interconnections and Contemporary Developments between the Aegean and the Regions of the Balkan Peninsula, Central and Northern Europe*, University

- of Zagreb, 11-14 April 2005*, AEGEUM 27, 421-429.
- Pakkanen, J. 2004: The Toumba Building at Lefkandi: A Statistical Method for Detecting a Design-Unit, *BSA* 99, 257-271.
- Pakkanen, J. & P.Pakkanen 2000: The Toumba Building at Lefkandi: Some Methodological Reflections on its Plan and Function, *BSA* 95, 239-252.
- Popham, M. 1987: An Early Euboean Ship, *OJA* 6 (3), 353-359.
- 1994: Precolonization: Early Greek Contact with the East. in G.R.Tsetskhladze & F.De Angelis eds., *The Archaeology of Greek Colonisation*, Oxford University Committee for Archaeology, Monograph 40, 11-34.
- 1995: An Engraved Near Eastern Bronze Bowl from Lefkandi, *OJA* 14 (1), 103-107.
- Popham, M.R., P.G.Calligas and L.H.Sackett 1989: Further Excavation of the Toumba Cemetery at Lefkandi, 1984 and 1986, a Preliminary Report, *AR* 35 (1988-1989), 117-129.
- Popham, M.R., & I.S.Lemos 1995: A Euboean Warrior Trader, *OJA* 14 (2), 151-157.
- Popham, M. & E.Milburn 1971: The Late Helladic III C Pottery of Xeropolis (Lefkandi), A Summary, *BSA* 66, 333-352.
- Popham, M.R. & L.H.Sackett 1968: *Excavations at Lefkandi, Euboea, 1964-66*, The British School of Archaeology at Athens.
- Popham, M., E.Touloupa & L.H.Sackett 1982a: The Hero of Lefkandi, *Antiquity* 56, 169-174.
- 1982b: Further Excavation of the Toumba Cemetery at Lefkandi, 1981, *BSA* 77, 213-248.
- Ridgway, D. 1997: Nestor's Cup and the Etruscans, *OJA* 16 (3), 325-344.
- Rutter, J.B. 2007: How Different is LHIIIC Middle at Mitrou? An Initial Comparison with Kalapodi, Kynos, and Lefkandi, in Deger-Jalkotzy & Zavadi eds. 2007, 287-300.
- 2014: Reading Post-Palatial Mycenaean Iconography: Some Lessons from Lefkandi, in Galanakis, Wilkinson & Bennet eds. 2014, 197-205.
- Sackett, L.H. 1982: Excavations at Lefkandi, Euboea, 1981, *AJA* 86, 284.
- Sackett, L.H., V.Hankey, R.J.Howell, T.W.Jacobsen & M.R.Popham 1966: Prehistoric Euboea: Contributions toward a Survey, *BSA* 61, 33-112.
- Sackett, L.H. & M.R.Popham 1972: Lefkandi: A Euboean Town of the Bronze Age and the Early Iron Age (2100-700 B.C.), *Archaeology* 25, 8-19.
- Sapouna-Sakellarakis, E. 1995: A Middle Helladic Tomb Complex at Xeropolis (Lefkandi), *BSA* 90, 41-54.
- Schofield, E.V. 2007: Lefkandi in Late Helladic III C Middle, in Deger-Jalkotzy & Zavadi eds. 2007, 301-

313.

Toffolo, M.B., A.Fantalkin, I.S.Lemos, R.C.S.Felsch, W.D. Niemeier, G.D.R.Sanders, I.Finkelstein & E.Boaretto 2013: Towards an Absolute Chronology for the Aegean Iron Age: New Radiocarbon Dates from Lefkandi, Kalapodi and Corinth, *PLOS ONE* 8 (12), 1-11.

Whitbread, I.K. 2014: Macroscopic Analyses of Late Bronze Age to Early Iron Age Pottery from Lefkandi: Preliminary Observations, in Kerschner & Lemos eds., 2014, 59-69.

Whitbread, I.K. & A.Livieratou 2012: Early Iron Age Coarse-Ware Pottery in Context: New Finds from the Settlement of Xeropolis at Lefkandi, *Mediterranean Archaeology* 25, 173-180.

### 追記

本稿初校校正中、恩師である高橋秀先生(立教大学名誉教授)の訃報に接した。ご学恩に感謝すると同時に、心よりご冥福をお祈りしたい。

(本学兼任講師)



図1 レフカンディ周辺地図

(出典：Lefkandi I, plate 2)



図2 レフカンディ出土の壺原幾何学文様期の土器

(出典：Lefkandi I, plate 265.a)

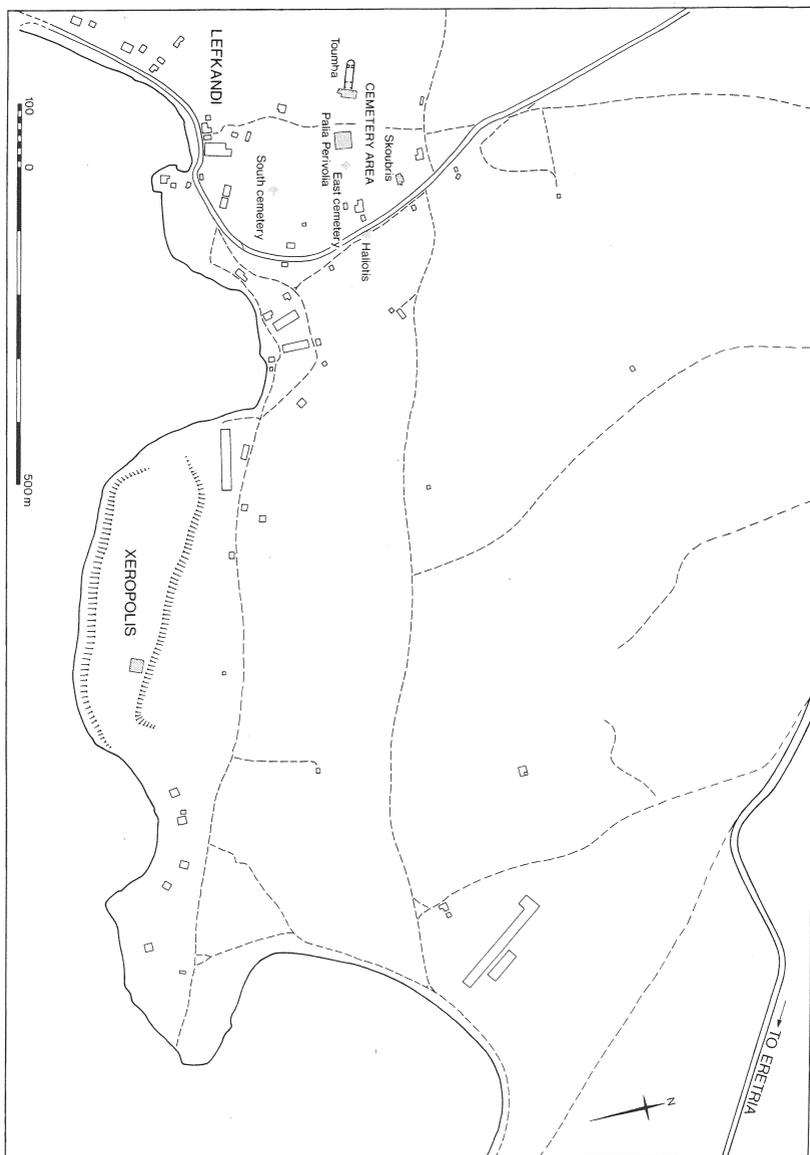


図3 レフカンディの調査区  
(出典: *Lefkandi III*, plate 1)



図4 レフカンディ出土の後期青銅器時代 III C 期の土器  
(出典: *Lefkandi IV*, plate 67)

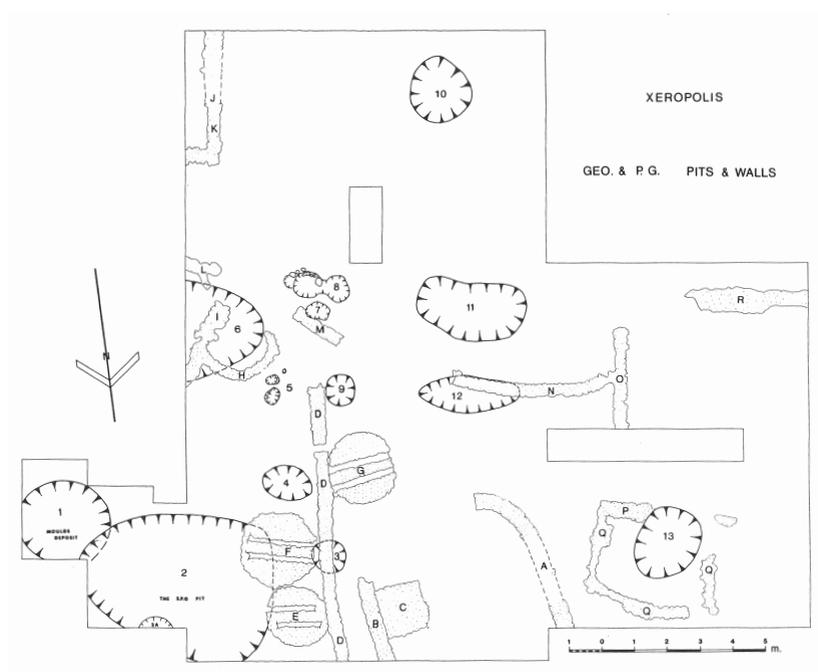


図5 クセロポリスの初期鉄器時代の遺構  
(出典: *Lefkandi I*, plate 11)

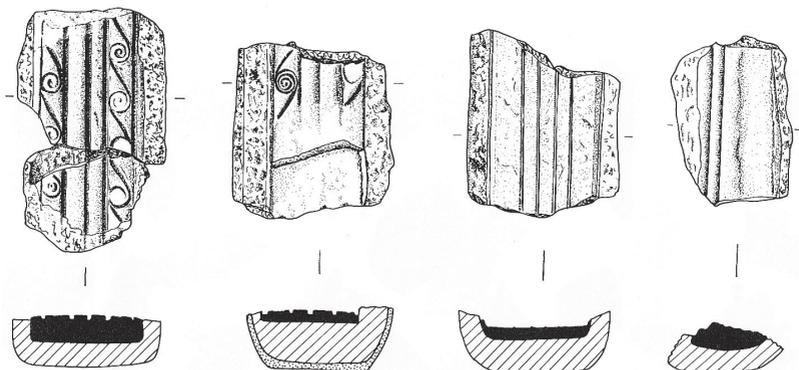


図6 クセロポリス出土の鋳型  
(出典：Lefkandi I, plate 13)

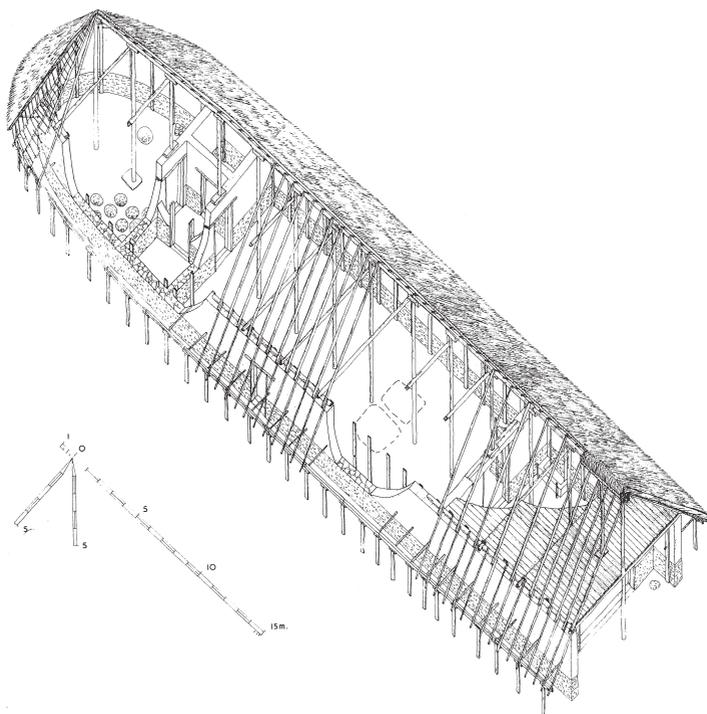


図7 ヘロオンの復元図  
(出典：Lefkandi II.2, plate 28)

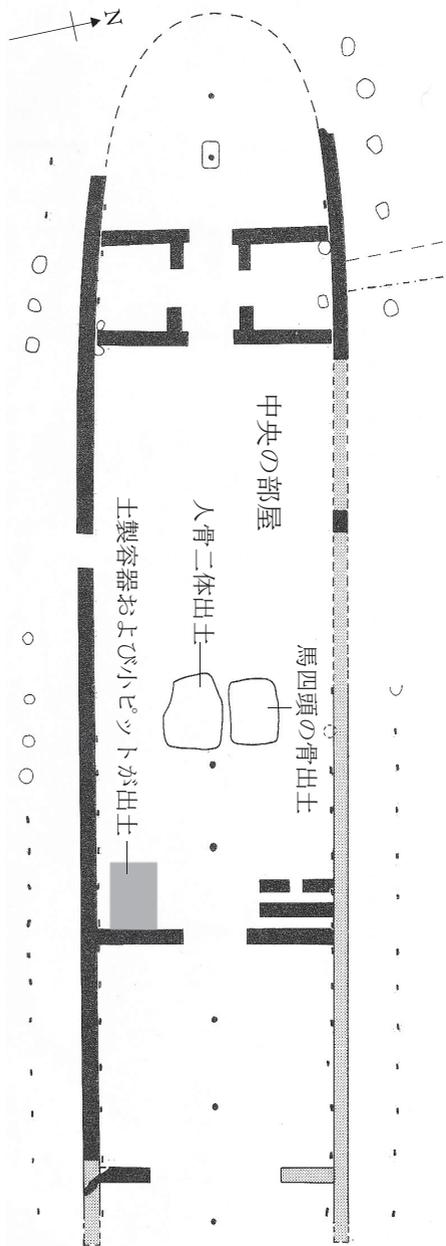


図8 ヘロオン平面図  
(Lefkandi II.2, plate 5をもとに加筆および修正)

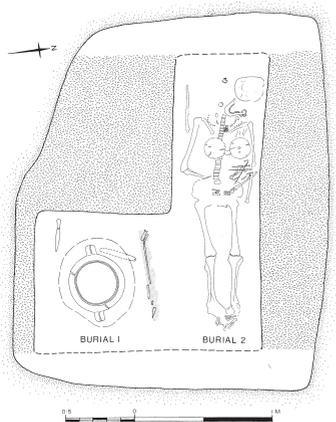


図9 ヘロオンの埋葬  
 (出典：Lefkandi II.2, plate 13)



図10 ヘロオンで墓標として使用  
 されたと思われる土器  
 (出典：Lefkandi II.1, plate 54)



図13 ケンタウロス像  
 (出典：Lefkandi I, plate 251)

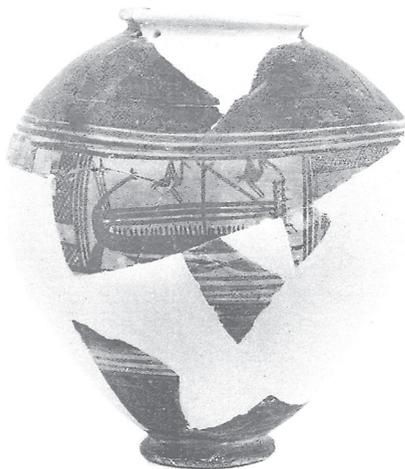


図14 船が描かれた土器  
 (出典：Lefkandi III, plate 94)

ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡(2) レフカンディ(高橋)

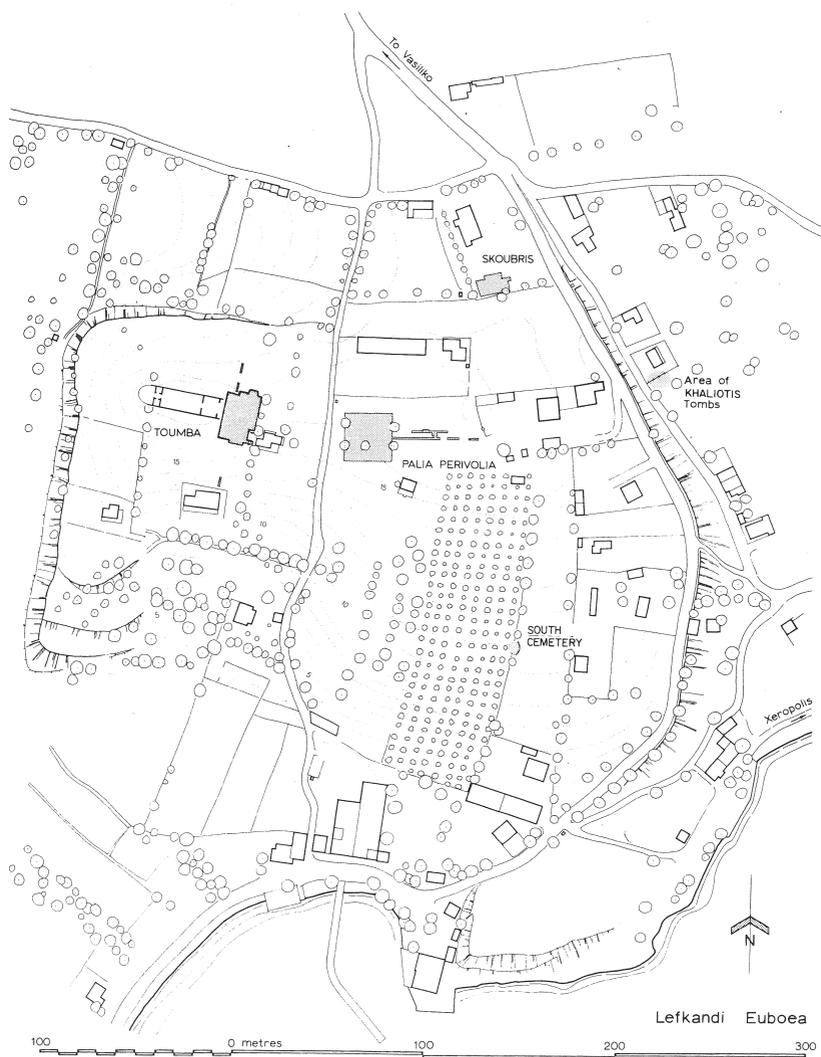


图 11 レフカンディの墓域 (出典: *Lefkandi III*, plate 2)

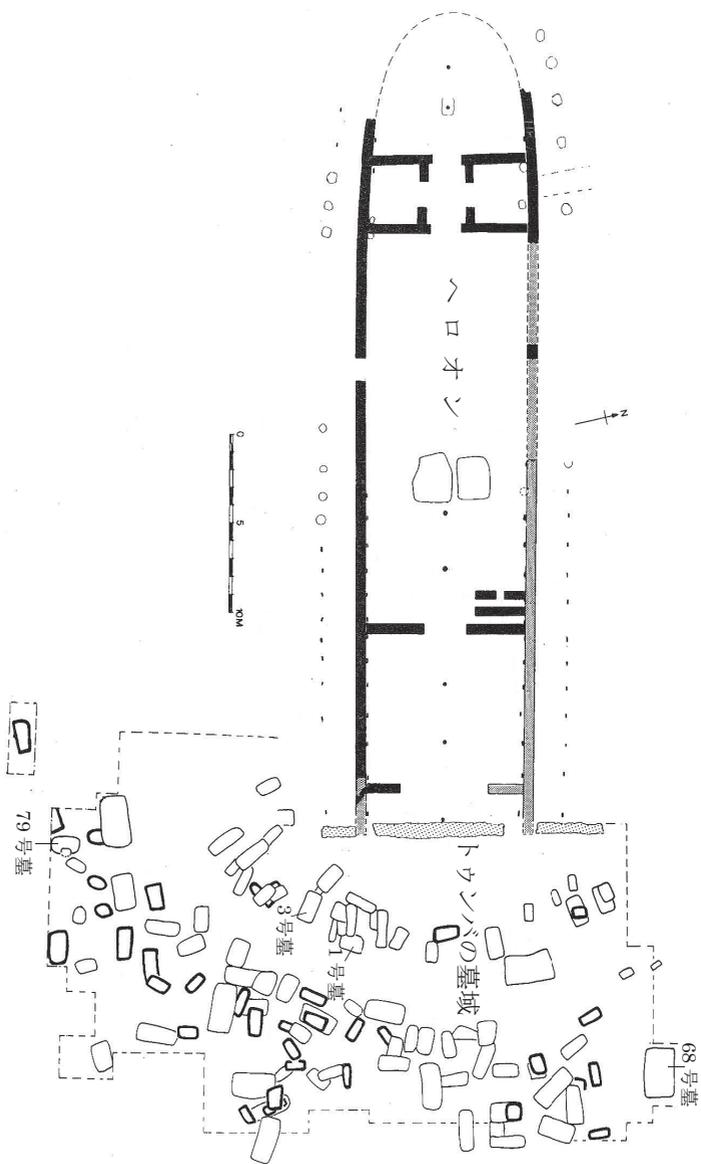


図12 トウソンの墓域とヘロオン  
(Leikandi III, plate 4 に加筆)

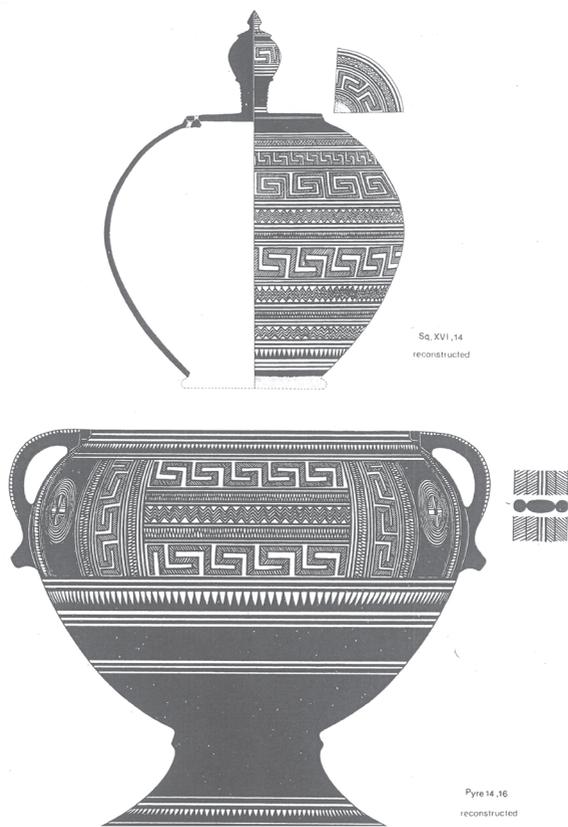


図15 アッティカ製の土器（出典：Lefkandi III, plate 110）



図16 車輪がついた馬型土製品  
（出典：Lefkandi III, plate 126.a）

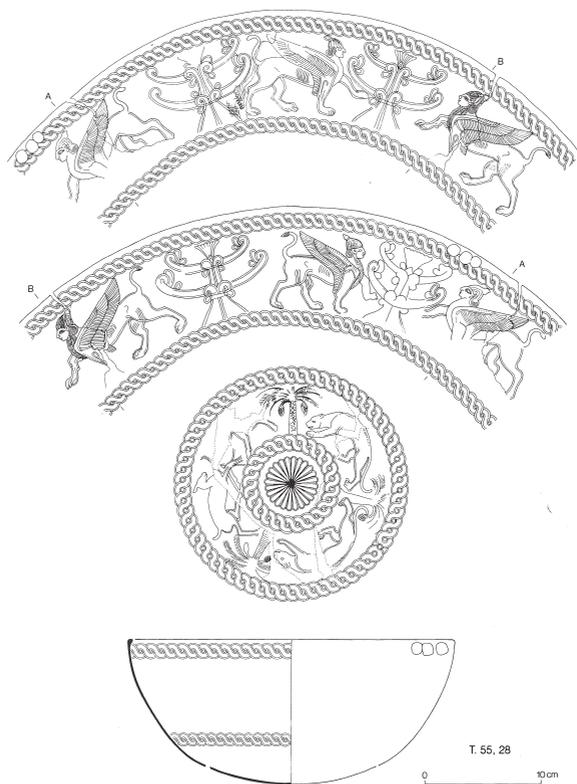


図 17 トウンバ第 55 号墓の青銅製の鉢  
 (出典：Lefkandi III, plate 133)

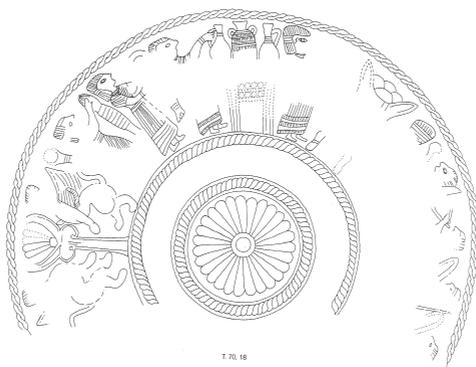


図 18 トウンバ第 70 号墓の青銅製の鉢  
 (出典：Lefkandi III, plate 134)